

---

# Anti/Magic end

シャロク坊主

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Anti/Magic end

### 【Nコード】

N2515T

### 【作者名】

シャロク坊主

### 【あらすじ】

墓地で出会った死にかけた少女は、羽のような軽さを求める少年の心を重くした。

すぐそばの世界で絶え間なく続く魔縁の戦い。侵食する「心影」<sup>ファンタム</sup>、連鎖する自殺。自由を目指す少年は、どうにかして少女の心を「軽く」するより他に、なす術がなかった。

## 1 羽のように軽い理由で

そんなにも簡単に魔法は終わる。

主観の上に成り立つ無駄。汲めども尽くせぬ知恵の地下水を、逆さにして水滴を求めるような愚行。

地道に井戸を掘らなければ、天地を回転させたところで、何かがマシになったりはしない。

Nicolaus Copernicus

### 1、羽のように軽い理由で

とあるオリンピック選手は言いました。

「達成感を求めて走っているのですしょう」

とても丁寧で、確信に満ちた箴言だ。けれどそんなの、自分で付けたおもりを外すようなものだ。数字なんて求めるから苦しむのだし、速さなんて求めるから孤独になる。欲望に根拠なんてないのだから、賭け金を積み重ねる土台にはしたくない。

なんてのは、はなっから遅くて重い凡人の負け惜しみで。

遅いなりに今日も楽しく近所を走る俺の目的は、「昨日より軽くなる」なんて抽象的なものだった。きびきび動いてれば重力を忘れられる。やがて肺から思い出し、脚へと伝わり地面に繋がる。

「うーくるし」

独り言を言っても誰も聞いていない深夜。幹線道路の並木道だが車も少ない。空気が昼間より綺麗なこと。向こうから来る通行人とどうやって目を合わせるか考えなくて済むこと。以上二点により、俺こと如月計人は夜に走る。しょうもない理由だが、そんな理由で何かを選べるのが「軽い」ってことだ。どうでもいい合理のために

フルパワーでエネルギーを使えるようになれば、もっと気楽に生きられることだろう。

時計を見るにあと三十分。kmで計ったことはない。メーターは持っていないし、地図でわざわざ計算するのもめんどろ。その日の状態に合わせて、三十分、一時間、一時間半の中からメニューを選ぶ。速度は時間に反比例する。というか、どれくらい速く走りたいかで距離が決まる。遠くまで行きたいと思うことはあまりなかった。切りがない。なにせこの道路、都心の先まで続いてやがるし。

それに、遠くまで行きたいのなら、電車に乗ってしまう方が速い。「あーあ、……辿りついた先が駅でしたが、一番嫌いなんだけどな」非日常が日常に回収されてしまうなんて、悲しみ以外の何物でもない。もしも走ることで達成感を得られるとするなら、それは走りついてしまった場所から、二度と戻れなくなったときぐらいだろう。

「って、さつきまでは思ってたんだけど……げふ」

だらだらと二時間も走っている今夜の苦痛は、どう考えても不合理な無駄に他ならない。

はっは、っはっは、すーはっは。

右脚の膝裏の筋が痛みを訴え、肺は呼吸のリズムを強要してくる。はっは、っはっは、すーはっは。犬みたいに口が半開きになっている。間抜けな顔だ。血流のせいでこめかみが熱を帯びる。見えないメガネでもかけてるみたいだな、鈍い重さだ。

「なにやっつてんだろ……げふ」

ぼやくたびに、セミオートになっている肺が不平をもらす。でもぼやかずにはいられない。

今日のコースは一時間。最果てのコンビニでコーラを買って、ごくごく飲んで、脇の山道にふと目をやったのが命取り。

暗い山道をオレンジ色の街灯がぼつりぼつりと何処までも彩って、くねって曲って先が見えずに。

「この道が終わるところまで走ってみるか」と思ってしまったのが運のつき。

うん、軽いのはいい。でも欲望では土台に足りない。走り終えたときに走る前から予感していた達成感を得ました。それって大いなるエネルギーの無駄じゃないか。ましてやそんなものすら得られずに、惰性で走り続けることになってはなおさらだ。

「げふげふ……わかつちやいるけどやめられない……げふ」

思いつきの積み重ね、賭けてしまった時間と努力が身を絞めつけて重くする。こんな走りは嫌いなのだが、始めてしまったら終わらせてしまいたくなる。ここで足を止めて帰るのはプライドが許さない。

笑つちやいたくなるぐらいの自縛だった。山道に終わりは見えないう。たぶんまだ登りきってもいない。うねうねうねうねとした峰の上でのたくつているらしいのだ。ハイキングコースならともかく、左手には一面の墓、墓、墓！ 何かが出てもおかしくないぞ。五月とはいえ熱帯夜一歩手前の夜なのだ。飲んだコーラが汗になって、肌を覆って甘ったるい。……げふ。炭酸なんて飲まなければよかった。げふげふ。

十五分後。

言つちやなんだが心が折れた。大きな看板に地図が載っていたのを言い訳に、ぐるぐる歩いてから足を止めて、ストレッチをする。あー疲れた。どうやって帰るんだこれ。コーラを買ったせいで、ポーチの中にはもはや一銭の小銭もないし。朝まで待ってバスに乗るのも不可能だ。

「歩くと……けっこう……かかるよなあ」

恐ろしいことに明日も学校なのだ。シャワーを浴びて飯を食べて死ぬほど水道水を飲んで、欲を言うなら十分でも眠りたい。さぼりたい。学校なんて行きたくない。などなど、湧いて出る欲望が疲れた足を鈍らせる。

「えーっと、達成感が、なんだっけ」

走ってる最中に考えることは、たいてい走り終わると忘れてしまう。抽象的な思考は無視して、喫緊の問題を考えよう。

「で、何処まで行くのか」

地図によると、三キロほど登った先に「三笠山」なる山の山頂があるらしい。聞き覚えのある名前だった。あー、最悪だ。小学生の頃に楽しくバーベキューに来た思い出があるぞ。ほら向こう側にはキャンプ場が……。

「ほらみる、回収されちゃった」

逸脱したあげくがこのありさま。

仕方ない。せいぜい不気味な山麓の景色でも眺めつつ、ちょこちょこ走って敗北登山に蹴りを付けよう。

墓の向こうを見下ろせば、延々と何処までも続く都会の光が天の川のように流れた。天地がひっくり返ったかのような錯覚。予定が一つ狂えば世界が狂う。

悪くない眺めも、今は遠すぎる隔絶に思えた。俺は明日、本当にあの中に混ざって授業を受けているのだろうか。そっちの方がよっぽど驚きだと思った。日常と非日常の逆転。そうか、回収されたとは言っても、日常にまみれたのではない。キャンプだろうと非日常には変わらない。

「……だから、なんなんだろうね」

とぼやいてみるとそれで終わり、なんだけど。

少し元気が出てきたのでスキップしながら山頂へ向かうことにした。やぶれかぶれの奇行である。夜中の墓地でスキップしながらぶつぶつ呟いてる男なんて、忌わし過ぎるぞ。俺はひよっとして妖怪か、今夜人間を辞めるのか、ああこれがランナーズハイ！何がこんなに楽しいのか皆目見当もつかないぞ。舞いあがっちゃって恥ずかしいなあ。ベンチに座っている女の子も呆れてるぞ。なんだか青白い顔してるし。

「…………え？」

思わず目をこすり、汗が目に入って鋭く傷んだ。

「っっ…………」

ぼやけた視界が瞬きを繰り返すごとにクリアになっていく。

その子は　黒か、紺か、それとも蒼か。薄暗い、必要最小限の街灯の中では判別がつかないワンピースを着ていた。白のハイソックスが浮き上がって目立つ。黒いローファーはいちおう地についている。青白い肌、髪の色は夜霧に混ざるような漆黒。　溶けだすように闇に混ざっている。

…………背筋が凍りつく。なんだこの子は。さっきまでいたか？

体つきからさっするに中学生ぐらいだろうか。陰になっていて表情がよく見えない。うずくまって、わき腹を押さえている。どうしたのだろう。ランニングで差し込んだか？　…………否、革靴で山道を走るバカはいない。

め、めちゃくちゃ怖いんですけど。

これ話しかけたら死にませんか？　怪談の登場人物ってこういう気持ちなのかと、死ぬ間際になって理解する。なんかろくでもないことになりそうだなと思うのに、避けて通ることができないのだ。物語の持つ吸引能力。「もうこんなこと死ぬまでない」と思う時、人は簡単に死を選ぶのではないか。げふ　あー、ひでえ混乱。

「あ、あのー」

声をかけてしまった。

女の子は無言でうつむいたままだ。それでいい。目を合わせたりしたくない。

「ひょっとして、道に迷ったりしてます？」

女の子は素早く顔を上げて俺を見た。　凍りつくような無表情で。

「ひいひい」

怖い。怖すぎる。人形みたいに肌が白い目が大きい呪怨みたい。何か言おうとしたが、口からまともな言葉が出てこない。「げふ」  
空気が甘い。胃液と混ざって粘性を増したコーラの匂いがきつい。

ただ俺の本能がこうささやいている。

無理にでも空気を変えないと死ぬ、と。

「う、うわー、こんなに可愛い美少女幽霊は初めて見たなあ」

「……」

女の子は何も言わずに、カツと目を見開いた。

「ぐ」怖い怖い怖いけど目を逸らしたら死ぬ　死ぬぞ、気張  
れ。

「すごい可愛いねえ、ああ可愛い可愛い」

実際のところちつとも可愛くない。不気味な少女マネキンが柔らかい関節を持って動いているに過ぎない。なんだこの瞳。なんでこんなに見開いてんの？　殺すんですか？　俺を殺すんですね？　わかります。

「ひょっとしてこの世に未練があったりする？　俺が解決してあげ

ようか」

「……消える」

地の底から響くような鈍い声がした。

「……はい」

心が折れた。割と豆腐メンタルだったりする。

だってこの子表情が動いてない……。

そりゃ幽霊が空気の振動で音を伝えるわけもないにせよ、何か言うときには唇ぐらい動かしてください……。

消えるのはいいが彼女から目を離すわけにはいかなかった。背中を見せた時が本当に死ぬ時だ。ぴりぴりと静電気が肩を撫でる。まるで手で撫でまわされてるみたいに……。

……足が、重い。

動かなければと思うのに、動けない。

金縛りだ。……あんまりだ。軽さを求めて幾星霜。こんな重苦し  
い死に方をするために努力してきたわけじゃないのに……。

「……ん？」

違和感があった。女の子が押さえている、細いわき腹のあたり。

黒ずんでいる。何か、液体を盛大にこぼしたかのような影の濃淡。  
ぴとり、ぴとりと、ベンチの隙間から何かがかぼれて落ちている。

「……」落ちついてよく見てみれば、この無表情は……ひよつとし  
て。

「痛い、のか？」

「……」

女の子は、何か言おうとして、とうとうその無理がたたったのか、  
眉根を寄せて唇をかみしめた。

くだらない魔法が解けた。

この子は生きているんだ。

腹を怪我して血の気が抜けて　　気力だけで命を持たせているよ  
うな、張りつめた恐ろしい表情で　　。

……いや、そういう設定の幽霊なのかもしれないが、そんなこと  
はふれてみればわかること。

俺は心のギアを最大限に軽くして、「この子は生きている」とい  
う疑惑を理由にした。

それで、動くことができた。よかった。無軌道な努力の積み重ね  
にも、多少の意味はあったのだ。

女の子の、わき腹を押さえていない方の手をそつと手繰り寄せる。  
抵抗はなかった。温かみもない。だらりと下げた手首で脈を計る。

トン、トン、トン、トンと、小さな手ごたえがした。断続的  
で、切羽詰まったりリズムだった。

「待ってる、すぐに救急車を　　」

呼ぼうとして、携帯を持っていないことに気付く。そんな重みは  
いらないと、真っ先に切り捨てたのが裏目に出た。

「くそ……。君、電話持つてるか？」

彼女は首を小さく横に振る。 堰が切れたように、苦しげな表情を浮かべている。

「……そうだ、墓地なら夜でも管理人がいるかもしれない」  
地図で管理センターの場所を確認する。 この先の別れ道を右、全速力ならすぐだ。

「待っていてくれ。すぐに救急車と人を呼んでくる」

「……ま」走りだした俺にぎりぎりでか細い声が届いた。

「……待って……お願い……」

振り向くと、彼女は不安定な吐息を無理やり殺していた。

「誰も……知らせないで。私は……大丈夫だから」

なんのことだか分からない。

幽霊だろうと狐に化かされていようと、ここで電話を求める以外の行動をするわけにはいかない。

「いいから、じつとしてろ」

振り切って走る。身体が軽い。まっとうな理由があればこの身体はきちんと答えてくれる。そういうふうには、鍛えてきたんだ。もっと息をしろ、足を動かせ。他のことは何にも考えなくていい。

カーブを右に折れる。よし、ゲートの前、守衛室に明かりがついている。電話を貸してもらえませんか連れが発作を起こしました

よし、言い訳は決まった。……走り込んでガラスの向こうを覗きこむ。おいじいさん、マンガ本なんか読んでんな。

手順は最速。

場所の説明を守衛に頼み、すぐにベンチまで駆け戻った選択まで含めて、可能な限りの最善を尽くした。

だが、そこに女の子の姿はなく。

俺は拍子抜けしてへたりこんでしまった。

やっぱり、狐にでも化かされたのか……？

すぐに違つとわかった。ベンチをさわると、暗がりによく見えなかった液体の正体がわかった。

ぬめった血潮の、濃厚な匂い。

ベンチの下の血だまりは、背筋が凍るほど大きかった。

座っていたあたりには……少し、熱が残っている。

アスファルトを舐めるように這いつくばって、血の跡を探す。

茂みの中へと途切れている。……くそ、逃げたのか。何を考えてやがる。あのままじゃ絶対に死ぬぞ。

死ぬ 自殺？

自殺……そうか、それで あんな目を……。

ミスった。取り返しのつかないミスだ。どうして目を離してしまっただんだ。

最善？ ふざけるな。

ほんの少し頭を働かせれば気づけるはずのことだったのに。

その後、守衛と、やってきた数人の救急隊員と、夜が明けるまで茂みの奥を搜索したが。

茂みは深い森へと続いていて、この暗さでは、息づかいのかけらすら見つけることができなかった。

翌日には五人の警官と二匹の警察犬が付近一帯を搜索した。だが信じられないことに、犬の鼻を以ってしても見つけることはできなかった。ベンチに残る血痕と俺の証言だけが、彼女の存在を裏付けていた。

担当の女性刑事は事件性ありと判断して、しばらく搜索を続けることを約束してくれた。俺が山にいた理由が軽いこともあり、痛くもない腹をずいぶん探られたが、うまく怒れもしなかった。

考えるだけで嫌になるが、認めざるをえない。

責任の一端は俺にある。

彼女にとっては、最後に神様が微笑んだような邂逅を、偶然の俺の気まぐれを、俺の理性が台無しにしたのだ。

……肺が、重い。

はっは、っはっは、すーはっは。

口を半開きにしても、ちっとも楽にはならなかった。

## 2 猫のいる部屋で

少年がなんだかよくわからん少女に出会うタイプの物語は嫌いだ。というより、飽きた。少女に限らずファンタジーというものに飽きてしまった。

かと言って現実が好きなのではない。順序が逆なのだ。現実には飽きたからファンタジーを求め、ファンタジーにも飽きたから居場所を失っている。

「あの世でもこの世でもない」なんて馬鹿けているだろうか。けれどもそれが真実だ。何一つ適応できない半端もの。いったいどうして生きているのか。存在は存在する意味より先にあるし、存在そのものが意味なのだとすれば、僕は「無意味」を体現する野原の狐だ。名前は織原信おりはらのしんと言う。

まあ、僕のことはどうでもいい。如月計人の話をしよう。

彼は小学生がそのまま高校に入ったような無軌道な少年で、四六時中動きまわっては余計なことに首を突っ込み続けている。「なんでもできるようになりたい」というのが口癖だ。その言葉通りになんんでも取り組むが、成果を上げることがそう多くない。

例えば……そうだな。いつだったか、学校の帰りに小汚い捨て猫を見つけたことがあった。彼は二日ほどかけて飼い主を探し歩いたが、捨てた方も拾ってくれる方も見つからなかった。経済的な理由により、自分の家で買うこともできない。すっぱり諦めた彼は、何事もなかったかのように、猫を元あった橋の下の段ボール箱に捨てなおした。

「俺には無理だったよ。自力でなんとかしてみてくれ」

願望の充足や目的の達成よりも、「どうせ捨てるなら拾わない」

「見つからないから探さない」という中途半端な合理性を嫌っての行動を好む。彼の場合、「万能」というのはなんでもできるという状態ではなく、できることならなんでもやってしまう心意気を指している。

僕にはよくわからない強迫観念だ。怠惰で身を滅ぼした経験でもあるのだろうか。

いずれにしても、彼は現実に飽きていない。

何もかも飽きつくした僕からすれば羨ましい限りで。

だから、この狭苦しい部屋で彼が語りだした怪談を、僕は信じることにした。

「信じるも何も」と計人は言った。

「俺は幽霊が出たなんて言ってるじゃない」

「わかってる」僕は答えた。

「君と知り合ってからもう二年になるけど、お互い幽霊の話をしたことないからね。信じるというのは、君の見聞きしたものについて疑いを挟まないという、文字通りの意味だよ。それ以上でも以下でもない」

「だったらいいんだけど」と計人は頭を掻く。向かいの座イスに腰掛けて、脚をこちらに投げだしている。吐き古したジーンズに真っ白なTシャツ。中肉中背だが、腕回りには筋肉が目立つ。いかにもスポーツマン然としているが、髪が少々長すぎる。耳の後ろを妙にねじった変則的なウルフ・カットだ。似合ってはいいない。

「ほんと、まいった。自殺なんて洒落にならんよなあ、実際」

僕の足下を見つめながらそう言う。僕は愛用のスプリングのきいたベッドに腰掛けて、彼の話聞いていた。ここは僕の家の一階にある僕の自室だ。この家の中で唯一生きてる場所であり、広さは六畳ほどで、二人と一匹で話しこむにはちょうどよかった。

「しかし、不可解だね。警察犬が見つけれなかったってことは、車がバイクか。乗り物で遠くに移動したってこと？」

「山奥からいったん道に戻って　って可能性はそりゃあるけど。」

はつきりしない。血痕はだいぶ山奥の方まで続いていた、としか教えてもらえなかったし」

計人はかなり取調室で絞られたらしく、苦々しい顔つきになった。「ふうん。ならもつというんな可能性があるわけだ」

「例えば、どんな？」

「ぱつと思いつくのは、川だよね。水辺で警察犬を巻くつて、フィクションならありがちだし。底に沈めば死ぬもする」

「やめろつて」と計人は睨んだ。「生きてるの前提で話せよ。そうじゃないと意味ないだろ」

「……なら、山奥で他の動物を殺して、あるいは傷つけて、自分の血の跡をカモフラージュした、とか」

「血を撒いた……なるほど、それは思いつかなかった」と計人は僕の適当な思いつきに感心する。純朴な奴め。

「腹に穴が空いているときに警察犬対策なんて思い浮かばないだろうし、空論だけど。ともかく一度現場に行ってみる必要があるんじゃない？」

「そうだな……」

計人の語尾が震える。

「やつぱ怖い？」

「あのときはテンパってたから怖くなかったけど……。いや、怖かったのを無理やり考えないようにしたつて感じか」

「明るければ幽霊は出ないよ。明日の放課後にでも行ってみよう」

「一緒に来るのか？」と計人は今更ながらに訊いてくる。

「てつきりめんどくさがると思った」

「乾いた人間には、血の一滴でも貴重な一滴さ」

我ながらいじけた物言いだなと思いつながら、僕はたぶん、笑っていた。

現実か、それともファンタジーか。はつきりと分類できないものが、計人を隔てて向こう側にある。

喜ばしいことだ。分類できないうちは、飽きようにも飽きれない。

ずつと枕の上で丸くなっていた猫が、のそのそと伸びをした。

「その黒、名前決めたのか？」

「ミイコにするよ。なんか、それっぽいし」

「そうか」計人は意味を悟り、即座に表情を殺した。こういう器用なところが僕の好みに合う。

妹の織原美意子は自殺した。中央線の最終電車のダイヤに合わせて飛び降りた。棺桶の扉は開けられぬまま、くしゃくしゃの骨の欠片は不思議な丸みを帯び、裏側の髓までなまめかしかつた。

自殺の理由は　わかるようで、わからない。それほど優しい両親ではないし、それほど優しい兄でもなかった。学校だって、誰であるうと基本はかつたるいものだ。友達が数人と、勉強をする理由が一つ以上あれば、なんとか楽しくやっていけるという程度のもの。美意子はどちらかと言うと、対人関係に不器用な方だった。中学に上がってから、家に友達を連れてきたことはない。

けれど、それ以上の事情は知らない。美意子は僕を嫌っていたし、僕は美意子に限らず自分よりも幼い人間があまり好きではない。過去というものに飽きていて、妹はその中で、わかりきったことに身悶えしている愚か者にしか思えなかった。

兆候はあった。夜中にトイレで吐いている姿を、一度見かけたことがあった。

「扉ぐらい閉めるよ」と僕は言った。

「うん、そうだね」と美意子は答えた。

そこから何を言えばいいのか、さっぱりわからなかった。迷っている間に美意子は扉を閉め、そのまま僕らの縁は断たれた。きつとそういうことなのだろう。

問題は、美意子が死んでずいぶん経った今でさえも、あの時何を言えばよかったのかよくわからないという　僕自身の成長のなさだ。

「ちょっと待て、美意子ちゃんの墓って、もしかしてあの山にあるのか？」

「あるよ」と僕は言った。

「それは……悪かった」と計人は謝る。大人じみた意味のない謝罪だった。

「ついでに墓参りでもしようか」と僕ははにかむ。「と思ったが、君と美意子って面識あったかな」

「一度会ってる。向こうは覚えちゃいないだろうけど」

「ま、そうだろうね」そして僕のことには覚えていて自殺したんだ。

「ともかく、行こう」と計人は断ち切るようにして言った。

「気になるんだ。あれだけベンチに血をこぼしていて、あんなに俺と話せたなら、まだ山の中で生きてるかもしれない」

論理的かもしれないが、科学的ではなかった。だが、計人はそんな程度の理由でも動ける。動きたいと思った時に、必要以上に行動を正当化しない。

だからこの家にも来るし、僕なんかとも縁を切らない。

一体何のメリットがあるのか。正気を疑うが、ありがたいのも確かだ。

妹の死で欠けていたものが埋まった。僕はそれまで悲しみ飽きてはいなかったし、後悔し飽きてもいなかったのに。今となってはもう、人としての最後の砦のようなそれらの感情ですら、容易く腰が上げられない。

自分の感情で動けないのなら、外から何かが来なければ、とつくに崩れてしまっている。

計人の感情に乗ることに異論はなかった。

彼はなかなか人を飽きさせない男だからだ。

### 3、空論の境界で

翌日。

駅前の花屋で菊の花束を買い、そのままフードコートに居座った。まだ五月なのに、ほとんど真夏のような暑さだ。羽織ったパーカーが一枚余分で不快なことこの上ない。

テーブルとイスは趣味の悪い色のパラソルで覆われ、日陰だ。座ると途端に動きたくなくなってしまった。

待ち合わせは駅前の五番バス乗り場で、まだ一時間ほど余裕があった。霊園行きのバスは一時間に一本しかないので、遅刻には気を付けないといけない。

何をするでもなくぼんやりとスーパーの買い物客を眺める。数人の主婦に怪訝そうな目を向けられたが、他には何も起こりそうにない。せつかく外に出たのだ。現場検証と墓参りのついでにもうひとイベント起こってもよさそうなものだが。

目を閉じる。

いつもやっているように、意識を外へ拡張する。まぶたを閉じても視界は経験で繋がっている。いつか辿った道を懐かしむように、交差点を抜けて、歩道橋を渡る。実際に歩いているわけではないので、速度には随分と断絶がある。浮遊しているような軽い足取りで見慣れた校門に辿りつく。公立三島高等学校。校門をくぐるとグラウンドがあり、陸上部の下級生がライン引きをしている。そう、授業は終わり、ホームルームと掃除が行われる頃だ。それほど飛躍してはいない。

三年の校舎に入る。下駄箱で上靴に履き替えることはしない。僕の下駄箱はもうない。部外者らしく土足で階段を上り、計人のクラスである三年一組の教室に入る。彼はまだ掃除をしている。誰か、女生徒と話をしている。彼女の顔は認識できない。僕の知っている

生徒ではない。

同学年で、僕が顔も知らない生徒がいただろうか。ほとんどの生徒は遠目を通して顔見知りになっている。立ち位置も掴んでいるはずだ。

転校生か、もしくは、一年生か。

転校生の可能性はなくもない。一年生だとすると、三年の教室で掃除をしている矛盾が発生してしまう。よって彼女は転校生だ。そうでなければ『この遠目は破綻する』。

続けよう。

計人は机を運びながら、器用に首から上だけで女生徒との会話を続ける。何を話しているのか。聴覚に意識を拡張する。

「……や、……だから……じゃなくて」

「」

女の声は聞こえないが、言い寄られて困っているように見える。

計人に彼女ができるとなると、今のライフスタイルを少し変えなといいけないなど、遠目と関係ない思考が頭の中に滑り込んでくる。当然制度が落ちてしまう。まずい、計人が『矛盾する行動』を取る前に、一度視点を引かなければ。

教室から出て、階段を上る。屋上の扉は鍵がかかっているが、そんなもの僕には関係ない。むしろ鍵がかかっていなければ、矛盾が発生して遠目が潰れかねない。

帰納的な矛盾は、現実に反しているのではなく、経験に反しているに過ぎない。よって致命的なものではないが、心がしらけてしまうので、どちらにせよゲームオーバーになる。

ともかくも屋上に出る。この空間においてルールを無視できるのは僕だけだ。

下界に視線を向けることなく、灰色の乾いたコンクリートを見つめて内面を落ちつかせる。雑念を振り切り、集中を取り戻す。

ただの、カメラになれ。自分とは関係のない日常を、切り取るだけの存在に。

いつ頃からだったろう。

次々と失踪した両親の行方が気になった、というのが最初の動機だった。妹の死後、まず母が姿を消した。彼女を家に繋ぎとめていたものは妹だった、らしい。表面上は嫌っていたようにしか思えなかったから、驚いた。なにくわぬ顔で四十九日を終えた翌朝、影も形もなくなっていた。

私物は置きっぱなしで、判をついた離婚届だけが残されていた。父はそれを見てしばらく固まっていた。具体的には、仕事を辞めて十日ほど部屋にこもっていた。そして十一日目に、父もまた家から姿を消してしまった。

離婚届も残されてはいなかった。僕は市役所に行つて、両親が離婚しているのかどうかを調べてもらった。届け出は出されていなかった。父はなんらかの復縁を求めて母を探しに行つたのだろう。僕に黙つて行つたのは、母と二人で新しくやりなおしたところだろう。それは母に比べればまともな思考だし、母にしたところで死んだ妹よりはマシだと思つた。白状すると、僕は親というものにとつくに飽きていた。それは向こうも同じだったのだろう。でも彼らは我慢をした。あまりうまくやり方ではなかったが、ともかくも家庭を壊すことはしなかった。

そのあげくに死なれてしまったのだから、「嘘はやめよう」と考えるのは、ある意味当然かもしれない。

僕は一人だけ嘘の中に取り残されたようなものだった。とりあえず生活のことを考えなければならなかった。通帳と印鑑は残されていたので、銀行から当座の生活資金を得ながら半年暮らした。

彼らは今何処で何をしているだろうと毎日考えた。羨ましいことだ。自分には新しい生活を始める活力がない。何も切り替わらないまま、無為に日々を過ごしている。

推理を積み重ねる。通帳の金はしばしば増減を繰り返していた。父が働いたり、住居を得たりしているのだ。こちらは一方的に切り

崩すだけだったが、お互いの生存確認はそうして行われた。三カ月もすると父のライフスタイルは安定を見せた。母は見つかったのだろうか。あるいは、もう母のことは諦めて、自分一人の新しい生活を始めたのかもしれない。

目を閉じて、父が何をしているのかを思い浮かべる。ヴァリエーションはいくつもあつた。彼は比較的優秀な営業マンとして十五年ほど金融商社で働いていた。やろうと思えばなんでもできるのではあるまいか。何処へ行っても即戦力のはずだ。

だが父の収入はそれほど多くなかつた。月に十五万ほど。支出はもつと少なく、十万前後に過ぎない。

父は収入より何を選んだのだろうか。静けさだろうか。趣味の読書を漫然と行っているのだろうか。女がいるとは考えにくかつた。それとも、金を積む必要もない、心の通つた女がいるのだろうか。

妄想は幾通りもあつたが、出発点は二つだつた。一人でぼんやりと本を読む父の姿、あるいは女と二人でいちゃつきあっている父の姿。

支流は少しずつ伸びていった。酷いときには一日数時間も目をつぶつて、父が営む生活のことを考えた。……よほど暇というか、他にやりたいこともなかつたのだ。

父の生活はおおむね破綻もなく、今もこの世の何処かと僕の脳内で続いている。

だが、今となつてはどうにでもなれだ。次第に飽きてきた僕は、母でも同じことができなかつたかと思ひ始めた。

母の情報は母の実家からもたらされた。祖母はときおり母から連絡を貰っているそうで、それをそのまま僕に流した。祖母は積極的に僕の面倒を見ようとはせず、母を庇いもしなかつた。たぶん、面倒だつたのだろう。祖母と僕は似たような性格をしている。

母は滋賀で「ともかく何かをして」「生きているらしかつた。どうして滋賀なのか、訊いても答えは返つてこなかつたという。

そこで僕は空白を空論で埋めることにした。母が何をして生きて

いるのか、どうして滋賀に身を落ちつけているのか。いくら考えても絞り込むことはできなかったが、それでよかった。母の生活の支流も次々に広がっていく。琵琶湖ではしゃぐ母の姿をおかしみ、ときにはそれに父の生活をぶつけることもした。いかにも滋賀あたりで細々と暮らしてそうじゃないか、あの二人。

半年経って、それにも飽きた。

もはや両親が何処で何をしようとも知ったことではなかった。ずいぶんと無駄なことに時間を費やした気がした。実際それはそうなのだけれど、少しは手ごたえや納得のようなものが欲しかった。

だから、たまたま仲のよかった如月計人という男の日常を、覗き見ることにした。

飽き飽きしていた高校を『精神的な理由』ですっぱりと辞めて、僕は三度、<sup>みたひ</sup>目を閉じた。

そして、一カ月。

僕は自分の妄想理論がまんざらでもなかったことを思い知った。なにせ、如月に確認することができるのだ。「今日は何をした？」と。彼は僕が学校と切れてからもしばしば家に顔を見せた。同情、友愛、あるいは気楽な遊び場を求めて。理由の確定に意味はない。彼はそれがどのような理由であっても行為を成すことを目的としているからだ。

かなりの頻度で、当たった。

それは彼が規則正しい生活をしているということでもある。僕の妄想は彼に関する予備知識からの帰納推理で行われている。

だが、休日や放課後には文字通り飛び回った。「横浜」「渋谷」「上野」「秋葉原」「新宿」「吉祥寺」「下北沢」彼の行動範囲は広がった。そのくせ月並みでもあった。金がなくなれば短期のバイトをし、成績が気になれば勉強をする。広く浅く、友人は多く、誘われれば何処にでもついていく。

なんだ、くだらない。

やりたいことを全てやったところで、檻から出られやしないじゃないか。

そう思いながらも、僕は彼の空転する日常の虜になっていった。やはり、羨ましかったのだろう。

どうしてこいつは飽きないのだろう。

「え？ そうそう。馬場のゲーセンで大会があつて。よく当たるなあ、織原の占い」

「まあ、暇だからね。何度も占いなおして、確率で判断してるんだ。何の意味もない見せかけのランプを混ぜながら、僕は自分の空論の精度を高めていくのが楽しみでしかたなかった。

だが、昨日の告白は何もかも想定外だ。

実在しているかもわからないような、傷ついた少女。僕の空論に取り込むことのできない、とつくの昔に捨てた妄想。ファンタジー

邪魔なような、もっと認めてしまいたいような。

いくら実感として傍にあらうと、僕以外の人間にとっては、僕のやっていることは途方もない無駄だろう。この楽しみもわかるまい。わかるとしたら、それこそお話の中の安楽椅子探偵アームチェアディテクティブぐらいのものだ。他の、とつくに飽きてしまったような荒唐無稽なファンタジーに介入されるなんて、うんざりだ。

まだ新鮮な涼しさを保った菊の花束を見つめながら、そんなことを思い　そう言えば、意識を何処に置いたままだっけと思いなおして

「誰」

見知らぬ女の声がした。

屋上に残しておいた意識に集中する。顔を上げると、いつもなら鍵がかかっているはずの、屋上の扉が開いていた。

「あなたは」

見知らぬ、女だ。

誰だ、こいつは。制服を着ている。さっき計人と話していた女と同じなのか？

こんな 女が (いけない、破れる)

僕の妄想にふれられる女なんて (周りを見る。誰もいない)

いないはずの僕しかいない)

「ここで何をしているの？」

いるわけが ない。

「 つは」

まぶたを開ける。視界が戻る。暑苦しい晴れた空。透かして見る薄汚れたパラソル。 まずそんな焼きそばの匂い。

「おか、しいな」

本来あり得ない要素によって空論が破かれた。

認めている。これは僕の妄想だ。いくらそこそこ当たるからと言っても、それ以上でも以下でもないんだ。物理的に反映させてしまつては、ましてや人に知覚などされてしまつては、空論が空論として成り立たない。 その手の失敗するパターンは、反復による訓練でとつくに乗り越えたと思つていただけだ。

「なんだ、あの女」

長い、黒髪だった。くりくりとした目を見開いて、半開きの口は少し間抜け。口調は居丈高で、理知的というのは少し褒めすぎ。

ただ、そう。美人だった。一度見たら忘れない顔、と言つていいだろう。あるいは、週刊誌のグラビアで見つけたら一週間で忘れてしまうような顔だ。

あんなのは、あの高校にはいなかった。

僕の知る限り、いなかったはずだ。

計人は約束の五分前にやってきた。紺のブレザーに赤いネクタイ。

制服姿だ。菊ではなく、色鮮やかなカーネーションの束を持っていた。

「わざわざ買わなくてもよかったのに」

「墓参りに手ぶらじゃ落ちつかないって」

バスに乗り、冷房に当たって一息つく。霊園行きのバスはシーズン以外は空いている。喪服と相乗りじゃなくてけっこうなことだと思ふ。

「ところで、時間ぎりぎりだったのは、美人の転校生と話しこんでたからかな？」

僕はからかうような口調でそう言った。

「げ、なんで知ってんの？」と計人は飲んでいたポカ리를吹き出した。

「やっぱりか」と僕は笑った。背筋には寒気が走った。

實在、していたのか、あの女。

どういうことだ。僕は僕が知らないことまで空論に取り込めるようになったのか？ 論理で突き詰めたのでもない、偶発的な新しい要素を？

それとも、あの女 本当に僕が見えて……？

「ホームズみたいだな。なんでわかったんだよ。また占いか？」

「僕と一緒にされちゃ、ホームズが怒るよ」

おかしな話だ。

僕の空論は、現実ではないし、無節操な妄想でもない。ただただ常識的に考えて起こってもおかしくないことを並べただけのそれだけのもの。

五十二枚のトランプのうち、一枚めくって、どの色の、どの数字が出て、非論理的ではないのと同じように。

その設定が破れたとき、何かを非論理的だと断定した時、僕の空論は形を失う。

そう、そのルール通り、今回も形は失われた。

空論が空論として機能しているなら、あの女を説明できる単語は一つだけだ。

「ファンタジー……か」

少年がなんだかよくわからん女と出会って物語が始まる。

そんなものはとづくに飽きていたはずなのに、ああまで見事に破られると、苦笑することしかできない。

「だから、俺は幽霊の話はしてねーよ」と計人が言う。

「わかってるって」と僕は言う。

でも、僕が見たのはきつと幽霊だ。

あの女が美意子に似ていないことが、救いと言えば救いだっただ。

#### 4 五月晴れの下で

三笠霊園はそれなりに古く、僕が生まれる二十年前から墓石を増やし続けている。三笠山を中心とした三笠峰の東南、東側の斜面がまるごと墓地になっている。いずれは西側のなだらかな斜面も墓地になるだろうし、キャンプ場の景観は台無しになるだろう。日本の人口減少のおかげで全てが墓になるような虚無感からは救われるのだが、今の日本文化を支えているほぼ全員が死に絶えてもしい限りは、墓は減るまい。

とはいえ、僕にとってはそう悪い話でもない。妹の骨を隔離できるのはありがたい。

あんななまめかしいものが、近くにあっては疲れてしまう。

日光で熱を持った黒い墓石に、備え付けのバケツと柄杓で水をかけ、菊の花を添えて形ばかりの墓参りをした。

墓石の下の砂利に、枯れた雑草が目立つ。一人なら掃除をしてもいいが、計人に手伝わせるわけにもいかないだろう。

と思う端からしゃがみこんで、計人はぶちぶちと草を抜いている。「いいよそこまですなくても。ついでだろ」

「たいした手間でもなし、お前も目立つ草だけ抜けよ」  
これだから。まあ、素直に感謝しておこう。

ぶちぶちと草を干切りながら、僕は訊いた。

「妹に会ったことあるんだよな」

「ああ」

「何処で？」

妹が生きているとき、僕らは学校でしか話さなかった。

「駅前のゲーセン」

「ふうん」あいつ、小遣いなんかろくに貰ってなかったくせに。

「ポップンうまかったんだわ。母校の制服だったんで、声かけてみたらお前と名字が同じだった」

「君は、そんな程度のことでも女に声かけるのか」

「しおれたタンポポを引きちぎりながらそう言った。

「べつにいいだろ。香取なんかと遊んでるときは、いつもそういうノリなんだ」

「なるほどね」

香取忍は元クラスメイトで、女と会話するのを生きがいにしていくような男だった。

「で、人の妹を毒牙にかけたと」

「毒牙？ ……あんな、中学生には興味ねーって」

「いや、この男は何にでも興味を持つ。」

情事まで覗き見る趣味はないから女のことは空論に含めていない（恋路に入ると破れるように条件付けしてある）。詳細はわからないが、やることはやってるはずだ。

「信じろよ。そのままマックで夕方まで話して、それでさよならだ」

「わかったよ。君と香取と妹で、僕をネタにして盛り上がったわけだな」

光景はすぐに目に浮かんだ。計人と香取は楽しそうに笑い、ドリンクを啜っている。だが妹の、笑っているはずの顔だけ、影になっ  
て見えなかった。

「まあ、そんなところ」と計人は言った。

「俺の中では、その時の印象のままだ。明るく楽しい女の子なんだよ」

「そういう側面も、あったのかもしれない」

僕は美意子の生活について想像をめぐらせたことがない。

妹について否定できることなど何もなかった。

十五分ほどかけて草むしりを終えた。愚痴をいいたくなるほど蒸し暑かった。シャツが汗ばんで不快だ。

「なんだか帰りたくなってきたな」

「これからが本番だろ」と計人は言った。

バス停から少し引きかえしたところに、案内板とベンチがあった。ベンチについていたはずの血痕は綺麗に洗い落とされていた。初動捜査は終わったのだらう。霊園の入口にいつまでも血の気があつたんじゃ、商売にならない。

計人はベンチの裏手に回った。道から外れると、密度の濃いスギの森が広がっていた。細くて威圧感がない。ここじゃ幽霊が出るには役不足、とも思えた。夜中に見ればまた印象も違ってくるのだらう。

「ここだ」と計人が指さした幹に、手形のような血痕が残っていた。赤黒い印。手元がここだとすると、身長は……一五〇センチ前後だらうか。頭に思い描いていた絵と合致する。

「本当にいたんだな」

「本当にいたつての」と計人はオウム返しに答えた。

「それで、どうする。ここから警察犬使って追跡不可能ってことは、僕らはやみくもに動き回るしかないわけけど……。そもそもこの山何処まで続いている？」

「三笠のキャンプ場を越えると、立川までだな。ひたすらくだった公園沿いに進むと多摩川に突き当たる」

「切りがない。何処まで行けば君の気が済むか、という問題なわけだ」

「いや、勝算はあるだろ」と計人は真顔で僕を見た。

「織原信の占いだよ。なんだか知らんがよく当たる」

「……なるほど。」

いや、確かに。君がそれを期待することは空論で予測していなくもなかった。

しかし、いざ現実に期待してみると、なんだかとても馬鹿らしい。

「笑ってんじゃねーよ。いちおうまじめなんだぞ、俺は」

「わかったよ。でも、必ず当たる占いなんでないんだ。外れても文句は言わないでくれよ？」

「言わん。それでダメならもう手詰まりだ」

目を閉じて、意識を集中する。最初の二択、傷を負った少女はただこの山にいるか、いないか。

いない方の可能性はひとまず否定してみよう。山を下り、誰かに目撃され、何処かの病院に担ぎ込まれていれば、とつくに警察の網にかかっているはずだ。

少女はいる。生きているか、死んでいるか。死んでいるなら警察犬が見つけるはずだ。

だが待て。山にはもう一人いたはずだ。少女の腹に穴を開けた犯人がいたはずだ。そいつが地中深くに埋めたということは考えられないか？

あるいは、担いで山を下り、別の場所で死体を処理した。警察犬が辿れたのは、少女が力尽きて倒れた場所まで。

最後の仮説だけが矛盾しない。常識に基づいて理詰めを考えるなら、それ以外にない。少女は死に、犯人が死体を運び去った。この山にはもう何も残っていない。

だから警察も手を引いたのだ。

いつもの空論なら、他の可能性は無視する。だが僕は、空論だけで計人の経験を現実には切り詰めるためにここにいるのではない。計人もそんなことを僕に求めていないだろう。

彼は、少女が生きているという仮定の下に、動けるだけ動いてみたいのだ。

合理的な見通しなんてなくても、生きていて欲しいというだけの理由で、彼は動ける。

ならば僕も、同じ仮定を下に空論を立てるべきだろう。

少女は生きて山にいる。

腹に穴を開けていながら、ベンチに座ってじっとこらえているなんて、馬鹿らしいことをする少女。人を呼ぼうとする計人をか細い声で止める少女。現実的にはどのような心理が考えられる。

一つ思いつく推理がある。

携帯を持っていなかった計人は『守衛を』呼ぼうとした。少女はそれを嫌った。と考えて見る。

すると、するつと筋が通る。『少女を刺したのは守衛であり、少女は自分を刺した犯人を呼ぼうとする計人を必死になって止めた』、という説。

だが

「なあ、まだ？」

「邪魔するな」

だが 犯人が守衛だとすると筋が通らない。普通、殺しかけた人間にとどめを刺さないで、放っておこうとするだろうか。いくら夜の霊山で、人が来る可能性が少ないとしてもだ。事実、その少ない可能性は起こってしまった。『のんびりマンガなんか読んでる場合じゃない』。

なら、『少女は守衛が犯人だと思っていた。犯人は守衛ではなく、守衛の格好をした別の男だった』。という説なら？

否定のしようがない。

警察は気付いているだろうか。 まともに考えれば誰でも気付くだろうが、怪談じみた計人の体験談をまともに考えようとするだろうか。

いずれ計人にそれとなく探らせてみるか。 刑事の名刺、一枚ぐらいは貰っているだろうし。

結局、少女の思考をトレースしたところで。

山に入れば当てもなく逃げるより他ないか。

いよいよあてずっぽうだ。トランプをひたすら捲って、当たりが

出ることを祈るまで。「生きて山にいる」という仮定の非現実さに空論が軋みを上げるが、それでも論理さえ繋がっていれば思考は続けられる。確率の低さに目をつぶれば、何処にいようと不思議ではない。

キャンプ場、山頂、墓石の間、多摩川、向かいの麓、行ったこともない、脳で適当に間に合わせた背景の中に、会ったこともない少女の姿が映り込む。『全ての場所に彼女がいる』。キャンプ場のベンチに死んだように身を横たえている。山頂の手摺りにもたれかかり、ぼんやりと崖下を眺めている。墓石の間を隠れつつ、蛇口から出る冷たい水を飲んでいいる。多摩川のぬめった水に足を浸して空を仰ぐ。麓から、遠くまで続く街並みを眺めている。

いずれも、成立する。ならばここから何処に行っても、計人が信じたことよって生まれた幽霊たちの、手向けにはなるだろう。論理で生まれたものは、行為によって死ぬ。

「山頂に行こう」と僕は言った。とりあえず、手近だったからだ。「森の中」は既に足を踏み入れているし、墓石の間では計人が納得すまいとも思った。

「そこに、いるんだな」

「ああ、いるよ」

僕が空論を断ち切ろうとした　そのとき。

山頂から崖下を見つめていた少女が、ふと、こちらを見た。

死にかけた、青白い肌。まぶたを開けるのもつらそうなか細い瞳の光。あえぎ声、濃紺のワンピースの、左の脇腹は、もっと重たそうな液体で染まっついていて

「来ないで」と。

耳を疑うような、鮮明な声だった。

「来ないで、ください」

空論が、破られる。

「っは」はっはっはっは。  
意識しないと息がとまりそうだ。  
いったいなんだ、この現象は。

一度ならず二度までも。空想の向こう側の存在に見つけられる？

気味が、悪い。

「お、おいどうしたいきなり。大丈夫か？」

計人が肩を握る。熱い。なんて変な男だろう。自分が納得するた  
めだけに、うさんくさい占いを指針にして、山をかけずりまわろう  
だなんて。

「いや、くだらない、妄想だよ」

行為で、殺そう。

山頂に行けば、何もいない。誰も死にかけていない、まっとうな  
現実が待っている。

「来ないで」

知ったことが。都合のいい仮定の下で蠢いている、お前はただの  
幽霊だ。

たかだか僕が想起した、計人の罪悪感を晴らすための、生贄だ。  
殺してやるよ。観測すればそれで終わり。

ファンタジーの入り込む隙間はない。

「来ないでください」少女が言う。

「山頂にいなかったら、たぶん何処にもいない。諦めた方がいいな」

「……そうか、わかった」計人は表情を殺して、俺の手を引き、山  
道に戻った。

計人が何を考えているのか、今はトレースする気力もなかつ  
た。

「来ないでください来ないでください来ないでください来ないでく

「 ださい」

少女は、山を登り続ける僕に向かって必死で叫び続けた。力のない声は妙に近くから聞こえた。まるで耳元でささやかれているみたいだ。

そう、僕は、少女の口元に耳を寄せている。決して逃がさないように、両肩を捕まえている。腕が四本あるみたいだ。二重化された感覚のせいで、体中に悪寒が走って止まらない。

ゆっくりとしか歩けなかったが、計人は辛抱強く待った。余計なことを一切聞かなかった。そんなに僕の妄想沙汰を真に受けているのだろうか。 ああ、そうだ。きつとそうだ。計人には僕を信じる理由なんて、きつと何でもよかったんだろう。

信じたいから、信じている。

「来ないでください来ないでください」

少女にまだ生きていて欲しいと、願っている。

羨ましい。なんて羨ましい前向きな魂だ。

「来ないでください来ないでください」

どうして僕は、妹のために、嘘のファンタジー一つもつけなかったのか。

「来ないでください」

「少し黙ってるよ」と向こう側の僕が言った。「もう少しで着くからな」

「いや」と叫んで、少女の瞳が僕から外れた。

山頂に、着いた。

そこには (ピシリと何かが壊れる) 空論と、まったく同じ姿の少女が

「嘘だろ」と計人が喚く。もう遅い、『見てしまったら否定のしようがない』。だいたいなんだその顔は。嬉しいんだろ、笑いが堪え切れてないぞ。

「来ないでくださいって 言ったのに」

壊れたのは、彼女を抑えつけていた偽物の僕。

想定通りに壊れ去った、空論だけで。

見つけた少女は、見つけられたまま。時が止まったように死にかけていて。

「でも ええ。これで楽にはなれそうです」

小さな、遠近感のある声で呟いた。

「見つけてくださって、助けようとしてくださって、ありがとうございます」

少女のわき腹から沁みが広がる。血が重力に反して、彼女の身体を駆け登って行く。胸を覆い、首を絞め、顔を浸し、髪を犯し、ぐちよぐちよとした、粘性の、血の塊に変わっていく。

「嘘、だろ」計人が空虚な言葉を繰り返す。

こんなもの、はなっから嘘に決まっているというのに。自分で信じたのなら、最後まで責任を取れよ。

やがて 塊は、再び人型を取り戻した。

パシャリと、飛沫が散る。水位が下がる。飲みこまれていた頭から徐々に姿を現す。

見慣れた制服だった。中学の頃は、あの飾りのない水色のセーラー服を毎日見かけた。いや、夏服だから、夏の間と言いなおそう。妹は、いつぞやトイレで吐いていたときも、あの服をまもっていたように思う。

中学に入ってから、いつも髪を短くしていた。ショートボブ、だったか。明るく見られたかったのだろう。鋭い目つきだ。母がなかなかメガネを買ってやらないから癖になってしまった。メガネを嫌がって、コンタクトにしても治らなかった。か細い顎と、それに見合った小さな歯。僕は母に似たおかげで、歯列矯正をせずに済んだ。

「嘘だろ」と、泣きそうな声を出したのは僕だった。

「久しぶり」と妹の言う。

「会いたくなかったわ、兄さん」

生前とはまるで違う快活な口調で、全ての予測を裏切って、会うはずもない妹が、五月晴れの山頂でそう言った。

## 5、工夫を凝らして

しきりに飽きたと繰り返す織原ほどじゃないが、俺だって巷にあふれているようなファンタジーは食傷気味だ。

それなりの数にふれているというシンプルな理由からだ。うちの家は親が帰ってくるのが遅く、昼間のパソコンは使い放題さわり放題。中学生の頃はネットにさわっているだけでいくらでも暇が潰せた。動画サイトに入り浸り、その影響でアニメや漫画にけっこうハマった。海外のあまり品がよろしくない掲示板で英語を覚え、外に出れば古本屋でいくらでも立ち読みができるようになった（嫌な客だ）。

オタクというほどでもない。ゲームをする子供が必ずしもゲームオタクではないように、ただ楽しく暇をつぶすのに便利だったというだけの話。中学の頃はとにかく反復が嫌いで、部活は三度替えたがどれも続かなかった。勉強も嫌いだっだし、女子も苦手だった。何をやっても楽しくなかったので、画面の向こうで楽しそうにしている奴らを見れば何でもよかったのかもしれない。

とりわけ惹かれたのは「やりこみ」の動画だった。一つのゲームを延々とやり続けるタイプのプレイ動画だ。幼少の頃にゲーム機を与えられなかった自分にとっては、目のくらむような羨ましい世界だった。同時に、理解しがたい世界でもあった。どうしてこんな、やってもやらなくてもいいようなことを繰り返せるのだろう。楽しいのだろうか。いや、辛そうでもある。千種族いるモンスターをそれぞれお九九九匹倒してカンストする、という動画を、せめて最後まで見ようとして、三パート目で飽きてしまったときになんとか悟った。

見るだけでは、この楽しそうな姿は俺のものにならない。

とにかく日常生活において何かをやりこんでみよう、と思った。

だがやりこめる対象がうまく見つからなかった。ほんとはゲームがよかったのだが、うちの親は元来まれに見るケチであり、金の無駄だと余計な娯楽品を一切与えようとはしなかった。昼飯代をケチつてゲーセンでちまちまと遊ぶのが関の山だ（今思い出しても本当に特別な贅沢だった）。

元手がかからなくてやりこめる娯楽。別になんでもよかったのだが、俺はそれを図書室に求めた。

「ねえ、如月くん」と、三時間目終わりの休憩に、クラスメイトの三鈴智子が声をかけてきた。例の美人の転校生だ。二年の終わりに学校を辞めた織原がどうして知っているのかは定かでないが、半分手外みたいになってきてるから、きつと魔女の如く水晶玉でも覗いたに違いない。

「如月くんの知り合いにさ、オカルト得意な人、いない？」

「オカルト？」

それはまたどんぴしゃりな話だった。

「三鈴さん、そういうの興味あるの？」

「あるよお」と彼女は朗らかに笑った。笑顔が似合うということにおいて、彼女は卓越している。あまり正面から見るとバチが当たるので、パラパラ捲っていた単語帳を利用して視線を誤魔化した。

「占いとか、風水とか。タロットなんか特に好きなんだよね。素人でも、占ったら占っただけの結果が出るからさ」

「そういうもの？」

「例えばね……。昨日も恋愛のことを占って、結果が死神だったりしたんだけど」

「それはひどいな」

「でも、燃えるじゃんか。その方が。恋人の正位置が出て順風満帆だったら、焦らなくてもなんとかなるよねって、結局何にもしないかもしれないし」

「あ……。なるほど。何が出てもいい方に反省するなら、占いに

害はないね」

そういう風に自分を鍛えていけば、占い一つ噛ませるだけでいろんなことが楽に乗り越えられるかもしれない。

もっとも、常日頃からすげえ苦しそうな占い師を友人に持つ身としては、真剣に悩んでいる人は未来が見える程度で悩みから解放されやしないとでも思ってしまうのだが。

「でしょ。けっこう楽しいんだよね。でも最近ちょっと頭打ちというか。タロットだけだとしても飽きちゃってね。それで、いっそや如月くんが『トランプ占い』が得意な友達の話してたっけって、思い出して」

「なるなる、了解」

実のところあいつの占いはトランプで見立てているだけで、トランプ自体は使わないのだけれど。そのことを知ったのはつい最近。三笠の山で奇妙な現象に巻き込まれてからのことだ。その「いっそぞや」の時点では素直に感心していたのだ。

「……」

まあでも、会わせてみるのもいいかな。

織原は『妹と同じことをしてきた』という理由で、三鈴を警戒している。だが俺にはそれが突破口にも思える。このままあの陰気くさい家で、幽霊と二人で暮らしていても、あいつの人生に先はない。今まで気を使って余計な口は挟まないようにしてきたけど、あれからそろそろ半月だ。あいつが自力でなんとかする気がないのなら、外から働きかけるのも無駄なことではないだろう。

「わかった。明日までに話してみるよ」

「ほんと？　ありがとう」と三鈴はにっこり微笑む。邪気がない。いい奴だと思う。誰かをネタにして笑いを取る、ということをしななのだ。彼女の笑顔は彼女一人で足りているから、見るだけで安心する。

「おーけー貰えたら、たぶんあいつの家か、駅前のどっかに寄ることになると思うんだけど、三鈴さんは都合の悪い日とかある？」

「んーん、いつでもだいいじよぶだよ」

「それはよかった」

俺にとつても行幸だった。アドレスを交換するところまではすんなり進んだのに、五月の幽霊遭遇から半月、すっかりそんな気分じやなくなつてしまつていた。軽い自分を取り戻すためにも、このチャンスを活かさない手はない。

悪くないタイミングでチャイムが鳴り、三鈴は「じゃね」と挨拶して、廊下側の自分の席に戻つて行つた。

で、何の話だっけ。

そうそう、学校の図書室に入り浸つたつて話だ。数の少なかつたジブナイルものから手を付けて、古典の名作全集を通して読み、博物辞典や雑学本にも手を付けた。素直に勉強する気にもなれず、やりこもつにも娯楽はなく、手つ取り早く満足感と優越感を手に入れたくて、なんでも思いきりできるようになりたくて。誰も知らないようなことを覚えていけば、周りと違った人間になれるかもしれないと思つていた。

休日には市の図書館に行つて、学校にはあまり置いていない画集やライトノベル、時代ものなんかを読みふけた。中身はなんでもよかつた。何かをしている実感は得られたし、事実、少しはマシな人間になつたと思う。

本読みの友人が何人かできて、そこそこやりこめるようになったかと思ひ始めたのが中学三年の秋。

ふと気が付くと、周りの世界がずいぶんとつまらなく思えた。

つまりは、狭い教室のことだ。見慣れた態度の教師や、たいして差もないクラスメイトたちのことを、冷やかに軽蔑してしまつていく自分がいた。

高校に行くという目的にうまく乗れなかつた、というのもあつた。あと三年も同じことを繰り返すのかと思うと嫌になつた。子供じみた理由だったが、それをふれてきた幻想や、現実の知識が補強した。

人を軽蔑するのに、理由はいらぬ。余計なものを知っているだけで充分なんだと思ひ知つた。いくら本を読んでも俺の成績は十人並みだったし、俺より頭が良くて、また取り柄がある奴もたくさんいた。三年間部活をやりとおした連中は立派だと思つた。

けれどそれが、なんだと言つたのだらう。

俺らは、全員、とつくの昔に失敗してないか？

入学した時点で、あるいは、もっと。自我があやふやな子供の頃から。

あまりにも乾いた檻の中で、互いの顔ばかり見てきたんじゃないだらうか。

無論、そんな考えは思ひあがりて。

ある程度知識が広がつた人間なら、誰でも思ひつくことなのだらう。今となつてはそう思ふ。

でも当時の俺はけつこうまじめにそんなことで悩んでいて、迫りくる『余分な三年間』が嫌で嫌で仕方がなかつた。かといつて、高校に行かないで、他にどうするとういうヴィジョンもなく。現金な親は高校の費用対効果を弁えていて、俺の子供じみた葛藤の相談相手にはならなかつた。

納得も説得もしてくれなくて構わない。ただ、一人だけでいいから、ロバの耳を以つてくだらない愚痴を聴いてもらいたい。誰かに言いたくてたまらない。そう思つた。

きっとその欲望のまま、かるーく誰かに言えたなら、今頃もう少しマシな人間になつていたことだらう。

でも俺は、誰にも言わずに。

もっとも簡単で、成長のない道を選んだ。

『高校生活そのものを、やりこんでしまえばいい』。

ゲームのように。読書のように。一人で完結してしまえばいい。

理由を持たず、好みを持たず、やれることはなんでもやれるようになれば。

今の自分にとって本の内容がどうでもいいように、高校生活の身なんて、どうでもよくなってしまふに違いない。

そうして、なんとか無事に公立高校に受かった俺は、収集自体が目的を兼ねるコレクターのように、学校生活を隅々までやり尽くして、楽しもうとした。

丸二年が過ぎ、また三年生になった今でも、方向性はほとんど変わっていない。楽しい奴と何人か知り合えて、無暗に人を軽蔑してしまう地獄から逃れることができた。それだけが、唯一得たと言えるものだと思う。そしてそれだけで充分だ。

次第に、高校の枠にとらわれず、もっと自分の気持ちに正直になれるようにもなってきた。できるなら、このまま死ぬまで、夢でも見るみたいにあわただしく生きていきたいと思っている。

それ故。

軽蔑を思い出してしまふような卑俗な物語は今となっては苦手だし。

荒唐無稽なファンタジーとなると、現実と関わりがなさすぎて、あってもなくてもどうでもよくて、コレクションする価値がなかった。

でも、あの山頂で出会ったものは、大いなる未知。

何が何だかわからない現実を、ファンタジーと誤解するほど蒙昧ではない。

俺が今ふれているのは、とても価値がある現実だ。

「こんにちは、計人さん。兄さんに用事？」

美意子の亡霊がインターフォンの向こうで喋る。

「ああ。今大丈夫か？」

「大丈夫。兄さんはいつだって暇だから」

底冷えのするような、悪意を端々に感じる喋り方だった。

「邪魔します」

玄関に上がり、二階にある織原の部屋に行こうと、怪談に足をかけたその時、

「あら？ おみやげもないの」と、耳の後ろに息を吹きかけられた。「うお！」鳥肌が走って、勝手に喉が震えた。階段に手をつけてよじ登り、一も二もなく距離を取る。

青白い顔をした、見慣れた制服姿。何も食べない、眠りもしない。一日中兄に付きまとって、思うさま復讐を遂げている薄幸の少女。

「美意子ちゃん、いきなり後ろに立つのやめてって、何度言ったらわかってくれんの？」

「ごめんなさい。だって、あなたのリアクション、おもしろいから」  
あははと、楽しげにはにかむ。笑顔だけは生きてるみたいだ。「笑うのが不気味だ」と織原なら言うのだから、俺にとっては生前に楽しくポップンをやっていた美意子こそが本物で。だからこの笑顔を評価しているのは世界で俺一人だけだったりするわけだ。

「なんだか機嫌がいいみたいだけど、織原、まだ生きてる？」

「生きてますよ、ま、だ」

「それはよかった……」

俺は刺激しないようゆっくりと怪談を登って、すぐ先にある織原の部屋をノックした。

「織原、いるか。如月だ」

「開いてますよ」

扉の向こうからぬっと青白い顔が突き出てくる。口がぎゃあと悲鳴を上げようとして、喉がついてこなかった。ぱくぱくしている俺をひとしきり嘲笑ってから、「開いてますよ」と繰り返す。

ほんと、心臓に悪い……。

織原の奴、本当に生き残ってるんだらうな……？

6 變毒の中で(前書き)

## 6 蠱毒の中で

織原はジャージとシャツを着て、これ以上ないというほどベッドの上でだらけていた。タコが念仏踊りでも踊っているかのように、脈絡なく関節を曲げている。

表情は徹夜明けかと思うほど死んでいた。日頃から表情筋を引き締めている奴なので、焦点の怪しい目で呆けられると不気味で仕方がない。

悪霊にとり殺される「悪い村人」を地で行っている友人を前にして、俺から言えることは一つしかなかった。

「慣れるよ」

「……僕は」織原はようやく俺に反応して、視線をよこした。

「何かに飽きてしまうのが嫌で嫌で、仕方なかった口んだけど」

「うん」

「こんなに飽きたいと思ったのは初めてだ」

「……そうだろうな」ってことは、飽きられないのだろう。

四六時中死んだ妹にケラケラからかわれては生きた心地もしないに違いない。

その妹はというと、机の上に設置されたかごの中で丸くなっている黒猫を愉快気に撫でているところだった。

「無害な猫ね」

ミイコは撫でているのが幽霊だろうと人間だろうとおかまいなしに、すりすりと毛皮を寄せては肉球でふんづける。

対して幽霊の美意子は、穏やかな微笑みを浮かべて猫を撫でている。彼女はただの物体には直接ふれられないらしいが、感覚器官と魂があるものには干渉できるのでそうだ。ドアも猫もすり抜けるが、猫の意識にはふれられると、そういうことらしい。

そういうことだとすると、「猫の意識」にふれている美意子の姿

を、どうして「猫の意識」に見られていない俺が知覚できるのか、という疑問が生じる。だがこの疑問は既に回答済みだった。

俺が猫にさわる美意子を目撃できるとき、美意子は猫だけではない、俺の意識にも同時にふれているということだ。

彼女を通して猫の意識が伝わってくる。もちろん猫の感覚器

官をもたない俺にそのまま伝わるのではなく、彼女の中で「それぞれの対応する感覚」に刺激がふりわけられるのだ。猫が「すりすりして気持ちいいなあ」と思う時、俺はその状態を視覚で受け取れば、「猫がすりすりされて気持ちよさそうだなあ」となるし、触覚で受け取れば「お肌すりすりされて気持ちいいな」となる。

……なんだかわかりにくい例えになってしまったか。ともかく、実際に猫が覚えている感覚と、俺が幽霊を介して知覚する感覚は別物だと言うことだ。

幽霊が見えるというのは、幽霊が干渉している生命体の知覚を、「視覚に変換させられて」受け取っている状態だ。幽霊にさわれるということは、同様の知覚を「触覚に変換させられて」受け取っているのだ。これは一般原則のようなものらしく、猫と人だけではなく、人と人の間でも同じ仕組みで幽霊体験が共有されているらしい。卑近な学校の知識で言うなら、『幽霊＝関数』というところだろうか。集合と別の集合を式で繋げるプロセスのようなもの。

だとすると。

幽霊をフィクションだと言い切ってしまうと、まずいことになる。幽霊が見えているのが俺一人なら、それで済む。全ては俺の錯覚です。俺は自分の狂気と死ぬまで付き合っていくことになるでしょう。ちゃんちゃん。

だが織原や猫も同じ幽霊が見えているとなると、話が違ってくる。俺の錯覚だと言い切るためには、俺の錯覚が俺と同じように見えてしまっている織原も猫も、やっぱり俺の錯覚でなければならぬ。

唯我論の態度を取るしかなくなるからだ。

中学の頃ならいざしらず、その思考自体が現実にかなる変化も

与えないような『空論』に現を抜かしたりはしない（洒落）。否、できない。織原も猫も俺と言い切ってしまうような『無意味さ』に、耐えることができないんだ。

『自分を含めた複数の知的生命体に観測されている幽霊を現実から弾こうとすると、唯我論に陥る』。

ならどうする？

認めてしまった方がいい。『幽霊はいるんだ。幽霊が己を幽霊だと知覚させている限りは』。

「そんなわけで、幽霊が人を驚かす理由はいちおう理解できたわけよ。何よりもまず、幽霊として成立するためなんだよな、きつと」

「あ……っそう」

俺が数日考えて結論を出したご託に、織原は何の興味も示さなかった。

「結局……何が……言いたいんだ、君は」

「俺らは狂ってないってことが言いたいんだ、たぶん。あー、あと、もし織原が罪悪感みたいなものに悩まされてるんだとしたら、筋違いだと思っぞ。お前個人に原因があるなら、俺にまで見えてるはずないだろ」

「いいえ、私は兄さんに恨みがあるの」美意子は猫から手を離し、部屋の中をふわふわ浮かんで、うつぶせでのたくっている織原の背に乗った。

「ゆっくり搾り取って、殺してあげるの」クスクスと愉快気に笑う。

何を聞いても、この調子。

美意子にはまるで会話をする気がない。俺の質問にもほとんどまともに答えてくれない。

結局、俺が出会った腹に穴の開いた子は誰だったのか。幽霊だったとして、どうして織原美意子に姿を変えたのか。未だに何一つわからないままだ。

「僕は……ダメだ」と織原が力なくぼやく。

「どうにも……幽霊がいる現実なんてなじめない」

「いるんだから仕方ないだろう」

「いないさ」と織原は言った。「君も、猫のミイコも、君と見た山頂の少女も、みんな僕の想像の産物だったんだ。ははは、この世には僕しかいないんだ。天上天下唯我独尊」

自棄になった力のない声だった。

「それで落ちつくんならそれでもいいけど。自分でも信じてないなら適当なこと言うなよ」

「いいんだよ。僕は『空論』が好きなんだ」

織原はむくりと上半身を起こして、俺に向き直った。

「それで、君は幽霊観賞にでも来たのかな？ 美意子の相手をしてくれるんなら僕は助かるけど」

「いや、べつの用事。転校生の女の子のことだ。前に話したことあるよな」

「あるよ。……名前は三鈴……智子だね。あいつもたぶん、美意子と同類だ」

「幽霊だとしたらずいぶん社会性のある幽霊だよな。まあそれ

はともかく、彼女がお前に会いたいんだそうだ」

そう言った瞬間、部屋の空気が変わった。

それまで機嫌よさそうにふわふわしていた美意子が、ひっじょうにコミカルな青白い炎を全身にまとわせて、織原の背後に回ったのだ。

「……兄さん」

「……なんだよ」

「死にたい？」

「……」織原は肩に伸びる青白い炎を無視して目を閉じた。でも、たぶん美意子が見せたいのなら、目を閉じても無駄なはずだ。光で見えてるわけではないのだから。

「三鈴は、占いに詳しい人を探してる、なんて言ってたけど。話題

の振り方が強引だったような気もするな」

「畏つてことか？」

「かもしれない。でも手がかりになるかもしれない」

「会おう」と織原は目を開けて言った。

「へえ、他の女と会うんだ」と美意子が織原にしなだれかかった。

「楽しいね、ウキウキだね、兄さん。生きていてよかったね」

「……お前も来い」と織原は耳をふさいで言った。でも、たぶん美意子が聞かせたいのなら、耳をふさいでも無駄だろう。うわ、きついな。夜中にエンドレスで「死ね死ね死ね死ね」言い続けることもできるんだ。

「へえ、私も行っていいの？」

「おととい……僕にやったのあるだろう。アレで追い払ってくれ」

「あ、それはステキね」と美意子のはにかんだ。「グレゴール・ザムザごっこね」

美意子が俺を見る。いや、そこにいたのは美意子ではなかった。

黒光りする胴体、細くしなやかな触角、わしゃわしゃと動く細かい手足が織原を背後から襲っている。

「う……わ、うわああああああ」

ゴキブリだった。巨大なゴキブリが織原の背を離れてわしゃわしゃと俺のところに「来るな来るな来るな」一目散にドアへと逃げる俺の、耳の穴の中に違和感が突き刺さってブウウウウウウウウウウウウウンとおぞましい羽音が共鳴する。

耳に、触角が、突き刺さって。

背中じゅうを細い脚がはいずり回っている。え？ なんだ？ 口の中に何か入ってる。舌が、舌がもぞもぞ動く何かに

「うわあああああごめんなさいごめんって勘弁してうわあああああああ」

それから、どれぐらい時間が経っただろう。

身体の中も外もゴキブリに埋め尽くされた俺は、ここが何処で自分が誰なのかうまく理解することができなかった。

「あら、やりすぎちゃったね。ごめんなさい」

「……クク、計人でもこの効き目だ。女なら殺せるぜ」

織原の目が据わっている。あ、そうだ、あいつは織原で俺は計人だ。そしてこのおぞましい悪霊が……わからない。いったいなんなんだこの妹は。

「お前、次やったら、絶交な。マジで」

「嫌だわ、そんな怖い顔で絶交だなんて」と美意子はクスクス笑っている。

「まだ調教が足りないみたいね」

「っげ」逃げようにも足腰が立たない。少し身体をよじるだけで全身を悪寒がはいずり回る。

「もついい、美意子」と織原がとめてくれた。

「そうね。続きは夜に。兄さんを夜明けまで」と美意子は艶のある声で言った。生きている織原と会えるのは今日が最後かもしれない。「ともかく」と織原は低い声で言った。「会おう。三鈴がどんな奴か確かめられる。美意子に対処する方法を持っているのかどうかも、な」

「美少女霊媒師が悪霊退治……ってんなら都合がいいけど。ただのオカルト好きな女子高生だったらどうするんだ？」

「知らんよ。泣いて喜ぶんじゃないか。ははは」

ここ数日で陰惨な性格になってしまった友人に黙とうをささげつつ、俺はどう対応するのが賢明かと考えた。

やはり、最悪の可能性を想定して動くべきだろう。三鈴がただのオカルト好きな女子高生なら、ゴキブリの大群に食われて廃人になってしまいうに違いない。

会わせるわけには、いかないか。

しかし、事態は俺の予想外を越えて最悪の方向に突き進むことに



女子にも一切容赦がない。泡を吹いてびくびくと　様子を見に次々と集まってくる生徒が、騒ぎを聞きつけてやってきた教員が、悶えに悶えて、狂乱のダンスを踊っている。

「ああ、楽しいわね、みなさん」と、天から降ってくる美意子の声。「学校に通えて、ウキウキね。生きていて、よかったわね。あはっ」奇声を発するバックダンサーをしり目に、黒いタートルネックを着た織原がゆつくりと歩いてくる。あの野郎一人だけ首筋を守りやがってと思ったときには、俺の首筋にも何かがかサカサと這いつづている。

「ああああああ」　「ゴキブリいいいい？　なんでええええ」  
飛び火した。

外の様子を見てゲラゲラと笑っていたクラスメイトたちが、机を蹴散らして我先に外に出ようとし、折り重なって互いを蹴飛ばしながら、虫に　虫に悶えて

考えるな考えるな考えるな口の中に何が入ってるかとか腹の中に重い違和感があるとかズボンの中になんかはいずり回ってるか考えるな。ああああ考えたくないのに考えてしまうつうつうつうつうつ。　「喝っ！」

スパンと頭をスリッパで叩かれた。誰に？　三鈴だ。三鈴が俺を叩いてる。

「だいじょうぶ？」

三鈴は周りを見まわして、「いったい何が起きてるのかさっぱりわからないんだけど」という顔をした。

「なんなのかしら、これ」

「逃げるんだ」俺は三鈴の手を取った。なんで三鈴だけ虫に取りつかれてないんだと考える余裕はなかった。逃げる逃げる逃げる、なんだかよくわからないが、この女と逃げれば大丈夫だ！

教室の戸を開けて、すぐに後悔した。廊下は既に虫で埋め尽くされていた。ゴキブリだけではない。巨大なムカデ、サナダムシ、異常に大きな、潰したら死ぬまで手に感触が残りそうな蠅が一番きつ



独り言の意味を考えている余裕はない。裏門まで、虫の回廊と化した体育館の脇を抜けて、走り抜く。

「待っていたよ」織原が、そこにいた。

死んだように暗い表情で、門柱にもたれかかっていた。その後ろには、この学校のセーラー服に着替えなおした美意子が、ふわふわと浮かんでいる。

「てめえ……自分が何やってるのか、わかってんのか」

「実験だよ」と織原は答えた。

「喜べ計人。僕と君が局地的に狂ってるわけじゃないらしい。幽霊は誰にでも見ることできる、一般的な現象なんだろう。これは予想外の結果だ。僕はてっきり、また僕と君だけが苦しむのかと思っていたのに」

そうか、それで　こんなことを。

「もう充分だろ……今すぐ、やめさせるよ」

「あいにく、美意子は僕の言うことを聞かないんだ」と織原は言った。

「外に出たら、こうなるだろうと思ってたんだよ、計人。それでも僕は　もう、耐え切れなかった」

「美意子！」

「なあに、計人さん」

美意子はいつもと同じ、からかうような口調でそう言った。

「もうやめろ。意味ないだろ」

「意味はあるよ」と美意子は言った。

「私、否定されるのが嫌いだから。人を自分を認めさせるためには、それなりの努力をしないとね」

「……お前はもう死んでるだろ。そんなことは、生きている間にすることだ」

「そうね。でも生きている間にできなかつたことをするのが、まともな幽霊の在り方なんじゃないかしら。ねえ兄さん。べつに、有象

無象がどうなるかと、知ったことではないでしょう?」

織原は、否定をしなかった。

「あのお」

三鈴がおずおずと手を上げる。

「確認がしたい」と織原が言葉で制した。

「三鈴智子、僕と君は、屋上で会っているか」

「……会って、いるよ」と。

三鈴は言った。

「そうか」

織原は、頬を、緩ませた。

「妹だけじゃ、なかつたんだな」

『空論』を、確認できる。なんと得難い他人が二人。

そう呟いた織原は、美意子に向かって、冷たい声でこう言った。

「いつまでやってるんだ。バカ妹」

「な、バカって ふざけないで。殺されたいの?」

逆上した美意子は虫たちを織原へ殺到させる。見ているだけで臍がすくむ、足から這い上って全身を覆う虫の群れ。

なのに 織原は。

口に虫が入ることもいとわず、大声でこう言った。

「飽きたんだよ、バカ妹。毎晩毎晩、同じことばかり繰り返しやがって」

ゆっくりと、虫を潰しながら歩いて、妹の足をひつつかむ。

「っひ」「自らも虫に塗れることを嫌った美意子は、たまらず虫の包囲を解いた。

「美意子」

力いっぱい妹を手繰り寄せた織原は、形のまま、力なき少女のように暴れる悪霊を、思い切り抱きしめた。

「お前、僕が嫌いだろう」

耳元で囁く。

「どうだ、さっきまで虫がはいずり回ってた身体に、抱き締められる気分は」

「ひ……やだ、ちょっと兄さ んっ」

兄は、喚く妹に、唇をつけて キスをした。

「ひゃあ……」と三鈴が場違いな奇声を発する。

美意子はしばらく全身でもがいて抵抗していたが、やがて諦めたのか、ふっと姿を消した。

五感の接続を、切ったのだ。

そこかしこで蠢いていた虫たちも、それと同時にかき消えた。

「悪かった」と織原は言った。

「妹には責任を取らせるよ。たぶん、みんなにはもつといい夢見させることもできるだろうから。酒池肉林で釣り合いを取ろう」

「そういう問題かよ」

足から力が抜けた俺は、その場にへたりこんでしまった。

「やってしまったものは仕方ないさ。三鈴さん、君も、妹が見えていたよな？」

「うん……禁断の愛なんだね」三鈴は答える。

「だいじょうぶなのかな。あなたに、コントロールできるの？」

「あいつ次第だ」と織原は言った。

「妹として僕に接するなら、ちょっとは僕の言うことを聞く気もあるだろうから」

「それって全然だいじょうぶじゃないよね」

「なら、君がなんとかしてくれ」と、織原はニヤついた。

「じゃないと、僕が買い物に行くたびに、街中が騒ぎになるぞ」

「なんとかするよ」と、三鈴は大真面目にうなずいた。

織原は裏門から去り、誰が呼んだか救急車の音が響いてきた。

強がりやがって……。何度繰り返されたって、蠢く虫に慣れるはずもないだろうに。

「強い人だね」と三鈴は言った。「強くなる方向が間違ってるような気がしないでもないけど。……あんな押さえこみ方も、あるんだなあ」

俺はようやく、質問をする気力が沸いた。

「あのさ、もしかして三鈴さん、美少女霊媒師だったりするの？」

「やだなあ」と、三鈴は身をくねらせた。

「美少女は余計だよ」

はい、そうですか。

## 7 密室の中で

集団譫妄。

学校はもう一週間も休校になっていた。校長から末端せいとに至るまで、ほとんどの被害者が今も壊れているそうだ。かく言う俺も三日前まで何も手につかず、眠ることすらできなかった。このままじゃ死ぬと思い、全身を這いまわる恐怖を必死で押さえて携帯で「ゴキブリ画像」と検索。結果を見て即座にぶっ倒れ、そのまま三日眠り続けた。

日頃からなんでもできるように自分を鍛えておいてよかったと思う。一度乗り越えてしまえば恐怖は引つ込む。喉元過ぎれば熱さを忘れるのが生物としてのまっとうな反応だ。

一日かけて腹を満たして、どうにか余裕ができた俺は、疑問符で一杯になった頭をすっきりさせるか、自分でも驚くほどの怒りで一杯になった心をすっきりさせるかの選択を迫られた。とても放置しておくことはできない鈍い痛みが体中を覆っていた。

どちらにしても、まずやることは情報の収集だった。ゴキブリという単語が出てくるたびに口の中をすっぱくしながらネットで検索を繰り返したが、事件に関する有益な情報はあまりなかった。大手ニュースサイト「千手KANNON」では「都内の高校で謎の集団譫妄 虫の群れが襲ってくる??」と銘され、話題にはなっていたが、イロモノとして扱われていた。地元のスレッドでは「なんか三島高校がやばい」と噂になっていたし、ブログやツイッターでも「家族が狂った」「大量の虫が沸いたらしい」「虫見せると怖がるからおもしろい」「うちのはもう平気だけど」などと近親者らしき連中が繰り返し書いていた。救助に当たった救急隊員や警官が匿名で「大量殺戮のようだった」と学校の様子を克明に描写している文章がコピペでばらまかれた。

引用しよう。

入口のあたりで二三十人が「踊って」いました。

奇声を発しながら、体中がかゆいのか、しきりに地面にこすりつけていました。

立ち上がろうとしても、何か重たいものが上に乗っかっていて、立てないようでした。

あるいは足にまとわりつかれて、ひきずるようにハイハイをしている生徒もいました。

足をばたばたさせて暴れるので、スカートがめくれて、女子は酷いありさまでした。

なんて声をかければいいのか、まるでわかりませんでした。私のことが目に入っていないのです。……いいえ、無理やり助け起こした生徒は、涙にうるんだひきつった目で私のことを怖がったのです。「こんなでかいのまで出てきた」と、叫び疲れたようなかすれた声で言っつて、そのまま気を失いました。

私が何に見えたのでしょうか。次にふれた生徒が、答えを教えてくださいました。

「近寄らないで、このゴキブリ！」

……そして、さっしの悪い私は、誰がゴキブリだと、その生徒を無理やり抱き起こしたのです。

彼女は泡を吹いて、全身をびくびくと痙攣させました。驚いた私は、思わず手を離してしまい、呆然としました。

顔を上げると、学校の敷地内には、何処までも、「踊って」いる生徒たちが続いています。

こんなことを言うのはなんですが、私には、彼らが、彼女たちが、だんだんうろうろと動く気味の悪い虫のようにすら思えてきて

。蟻にたかられている死にかけの虫はこんなだったなど、思い出しています。

それきり、学校の中に一歩たりとも進むことができなくなりました。

ああはなりたくなかったのです。

引用ここまで。

実際には、生徒たちは昼ごろになると「持ち直した」らしい。どうやって持ち直したのか定かでないが、ともかく警察の指示のもと、生命活動に異常なしと判断された大多数は、入院ではなく自宅待機を命じられたのだそうだ。母によると、保護者会での情報交換は頻繁に行われているらしいが、それでも「まともな」情報はさっぱり出てこないのだと言う。

おおよその流れを掴んだ俺は、三鈴智子のアドレスにメールした。誰かとメールができることをありがたいと思ったのは初めてだった。

カラオケ部屋は最高だ。昼間の学生料金はマックでだべると同じくらい。おまけに喉が枯れるほど歌うこともできるし、話しこむこともできる。

恋路が目的ならいきなり二人で密室に入るのはやりすぎだろうが、三鈴はそんなこと気にしないだろうと思ったし、事実まったく気にしていなかった。

「先歌う？」と向かいのソファで脚を組んでいる。白いカーディガン、ストライプのシャツ、細身のレギンス。似合ってはいるがそれだけの、無個性な服装だった。

「歌う気分じゃない」と俺は言った。

「いろいろと説明してもらいたいんだけど」

「タダで？」

いきなり金をせびられるとは思わなかった。

「ここは、奢るよ」

「そう、ありがと」とにっこり笑う。なんだかお腹に穴でも開けたくなるような笑顔だった。

「じゃ、とりあえず歌おうよ。話はそれからでもいいでしょう?」

「歌、好きなの?」

「べつに。せっかくカラオケに来たんだからとりあえず歌おうってだけ」

と言いつつも、三鈴は手早く四曲も予約を入れて、聞き覚えのある aiko の歌を歌い始めた。AKB48、コブクロ、典型的な売れ線ポップのフォロワーらしい。

ずっと聞いているのもバカらしかつたので、思い切り叫べて歌唱力がいらぬシザーズマンというメタルバンドの曲を間に挟んで叫びまくった。死ぬ死ぬ言いまくってると思外にも三鈴のノリがよく、一緒になって可愛い声で叫び始める。興が乗り、なるだけ二人で歌える歌を選ぼうじゃないかという雰囲気になって、ミスチルメドレーを歌い続けて三時間が過ぎた頃。

「延長してください」という自分の声で俺はようやく我に帰った。

「そろそろ本題に入りたいんだけど」

「え……あ、そうだね」三鈴はまだ歌い足りないのか、未練がましく俺とテレビを交互に見てから演奏停止のボタンを押した。

「気、晴れた?」と聞いてくる。

「どうやら俺を和ませようとしてくれていたらしい。」

「晴れたよ、ありがとう」

「うんうん。じゃあ話そうか。その前にリンゴジュース追加で」

店員が去り、ジュースをほとんど一口で空にしてしまった三鈴は、

「何処から話す?」と言った。

「なんで幽霊なんてものがいるんだ?」

やはりそこ、だった。

自分なりに考えて、なんとか整合性を付けようとしたこともある。『複数の意識に同時にふれることができる関数のようなもの』。

それは、現象の説明にはなっているかもしれないが、成り立ちの説明にはなっていない。

だが、『関数が何故あるのか』なんてことを聞くのは、やは

りバカけているのだろうか。ある物理現象Aが変化していく上で、別の物理現象Bの変化との関連性が見つかった。『何故見つかるのか』 それは人知を超越した問いだ。疑問に思う方の頭が狂っている。

仮に全ての物理現象の関連を説明できる万物理論が成り立つとしよう。でも、『何故そんなものがあるのか』と問いの形を変えてしまえば、きつとそこには何も無い。物理としてないものを物理学に求めるのは間違っているのだ。存在の実感は、『疑問を感じる前に既にある』としか言いようがない。

せいぜいデカルトの箴言を知ってるだけの俺にできることは、無様に問いを立てるだけだった。

「関数　？　うん、いいんじゃない。けっこう合ってるかもよ。」

詩的すぎて私の説明にはそぐわないかもだけど」

「詩的？」

「怒った？」と聞き返してくる。

「そんなことで怒らない」そのからかうような物言いには少しイラ立つけれど。

「それはよかった。……えっと、まず、夢の話をしようか」と三鈴は言った。詩的なのはどっちだと突っ込みたくなつたが、我慢する。「如月くんが夢を見ているとします。でも、目が覚めるまでは、その夢は現実なんだよね。目が覚めて初めて、それが夢だったとわかる」

「まあ、そうだな。それで？」

「起きている側にいる人間にとっては、夢は無害なんだよね。続かないから。でも、夢の中で「これは夢だ」と気付いたことって、ないかな。いわゆる明晰夢ってやつ」

「……体験はない。でも、あってもおかしくないとは思う」

「そうだよな。あってもおかしくはないんだ。例えば、私が今ここで、鞆から銃を取り出して、如月くんを撃ち殺そうとします」

三鈴は指をピストルの形にして、俺に向けた。

「如月くんは、「これは夢だ」と断定できるかな？」

「……いや、できないな」と俺は答えた。

「バカみたいなことで、常識に反してるけど。物理的には可能だから。そこで迷う」

「そうだね」と如月は頷く。

「なら、外に出て、太陽が東に沈んでいたとしたらどう？」

「……それは、夢だろ」

「そうかな。私たちがこうしている間に、地球が逆回転しちゃったのかもしれないよ？」

「それこそ物理的にありえない」と俺は言った。

「ま、ありえないよね」と三鈴は同意する。

「何かを夢だと断定できるのは、常識に反しているときではなくて、物理に反しているとき。で、ここで問題になるのが、私たちは物理に反していることを既に体験してしまっているってこと。死んだ人間が見える。いもしないアレの大群に襲われる。さて、なんで私たちは、『ここを夢だと断定できないんだらう？』」

言われてみると、確かにそうだ。

『夢オチ』にしてしまえば、それで済む話だらうに。

幽霊は、ここが夢であることの証明。物理法則に反したことが一つでも起これば、その世界は物理的になりたっていないのだから。

それ以上の意味を、求める方がどうかしている。

でも、それは、あまりにも、

「夢オチなんて、無意味じゃないか。何の解決にもなっていない」

ここが夢なら、何を考えることもない。

何処にも続かない、思考停止だ。

「でもね、世界が夢だろうと、オチなんてつかないんだよね」と三鈴は言った。

「例えば、ローマ・カトリックがガリレオをずーっと異端扱いしてた理由って、私たちにはよくわからないでしょう。でも、当時は物理法則ではなく、キリスト教の法体系が西洋世界の現実の基準だっ

たんだ。協会にとって、ガリレオはこの世をなんでもありの夢才ちに叩き落とす『生産性のない男』に過ぎなかったんだよね。　　事  
実今でも、地動説はキリスト教にとって、何の生産性もないものだ  
し」

「あー……おっけー。言いたいことはわかる」

パラダイム・シフトだったか。多少なりフィクションに慣れ親しめば、『物理は絶対の法則じゃない』という言葉が、『荒唐無稽』の言い訳に使われているのは痛いほど知っている。事実、そんな作品たちが痛くてたまらなくて、とてもまともには思えなくて、俺は現実の方をやりこむことに決めたのだ。

「この世はおおむね、物理法則にしたがっているように見える。でも、ときおり破けて夢のようにも見える」と三鈴は言った。

「夢　作り話や睡眠フィクションと区別するために、英語でファンタジーとしておきましょうか。破れ目が、死者の形を取るなら『幽霊』、不自然な物理現象を伴うなら『魔法』、二元論の法体系に分類するなら『奇跡』、あるいは、『冒険』。汎神論ならただの『事例』に過ぎないので、囚われることはそもそも無意味　とか。いろんな説明機能がある。現代の日本では物理法則が基準だから、結果として汎神論に似てくる。『神がいたらいいね、なんの意味もないけどさ』

　　って感じ？　もちろん、意識を「国」でまとめるなんてのも暴論だけどさ。それでも、大雑把には、繋がってるでしょ。私たちの意識そのものじゃなくて、『意識の在り方を定める基準』が、さ」

話が、見えた。

「俺たちは　同じ年代の、同じ学校に通う連中は、意識はともかく、『意識の基準』にそう差はない。たしかに、そうだ。だから『みんな同じものを非現実的だと見なせる』。幽霊が生きているものの意識ではなく、ただの関数、複数の意識にふれえる『意識の基準』に過ぎないなら……」

「規格が統一されてるなら、あとは関数をいじくればいい。ゼロ以下の虚構から、ゼロ以上の自然の中に、ぼんと意識を投げ入れる

すると、虚構だった虫たちが、日常の中に氾濫する」

三鈴は、パチンと、指を鳴らした。

「ここにいるおもちゃの兵隊のようだね」

すると 小人が、テーブルの上でお辞儀をしている。

これは 軍服だ。赤くて分厚いコート、手には銃剣 古めかしいマスキット銃だ。

きゅっきゅつと足音をさせて、水滴で濡れたなめらかなテーブルの上を、行ったり来たりしている。

生きて動いているように見える おもちゃの兵隊。

「見えてる？」

「 三鈴が、やったのか」

「うん。私は、自分の『意識の基準』を自分で変更できるように、トレーニングしてるの。『自分の見たいものが見れるように』、ね。それが本当に自分の意志で生きるってことじゃない？」

いや、まだだ。

こんなもので納得はできない。

「三鈴が、見たいものが見えるようになる理屈はわかった。でも、どうして三鈴が自分の意識の基準にふれたら、俺までおもちゃの兵隊が動いているように見えるんだ？ 俺の意識と、三鈴の意識は、物理的に繋がってないぞ」

幽霊が見えることが脅威なんじゃない。たった一人の体験だけなら、それこそ『夢オチ』でどうにでも片が付く。

複数の人間が見ているから、反自然的な現象として成立する。それこそが脅威なんだ。

「あのおさ、如月くん、カン違いしてるよ」と。

三鈴はクスクスと、楽しそうに笑った。

なんだか、 怖い、微笑みだった。

「私がおもちゃの兵隊見てることを、あなた、どうやって証明するの？」

「え？」

「私には、確かに見えてるよ。でも、そんなこと私が言っても、なんの証明にもならないよね。あなたは、あなたが見ているものしか、信頼できないでしょうに」

それは、そうだが。

「どうして私が実在しているなんて思うの？」

「だって、そんなの」

「あなたが信頼できるのは、あなたの『意識』と、それを成り立たせている『意識の基準』だけでしょ？」

おもちゃの兵隊が、俺に向かって銃を突きつける。

「そんなのは、ただの唯我論だ。夢オチと何が違うんだ」

俺は、そんな幻に、恐怖を感じてしまっている。

「夢だけど、オチなんてつかないんだよ」と三鈴は笑った。子供をあやすような 違うな、客に何度も機械の使い方を説明する、店員のような笑顔だ。

「私たちの『意識の基準』は、相互に干渉できるんだよ。例えば、言葉や、身ぶり、視線、態度、物語。ね、まるで物理に挑戦するかのように、フィクションばかり求めてるこの時代においてさ」

「

魔法は『魔法になれる』んだよと、三鈴は言った。

ドアが開く。店員が、空いたグラスを下げに来た。

おもちゃの兵隊が、店員に反応して、銃を向ける。

「ナニモノダ」と、金切り声で叫ぶ。

店員はきよとした顔をして、何事もなくグラスを片付け始めようやく違和感を「現実だ」と認識できたのか、「うわ！」と声を上げて、足下を震わせた。

「よくできたおもちゃでしょ」と、三鈴が彼に笑いかける。

「りんごジュース、追加で」

「は、はい……」

店員は釈然としない表情で、何度か振り返りつつも、グラスを一つも落とすことなく部屋の外へと出て行った。さすが、プロフェッショナル。

「彼にはどんな風に見えたのかな」と三鈴は言った。

「おかしいだろ……。あの店員と俺たちは、なんの言葉も交わしていない。『意識』を媒介するような、体験が共有されていない」

「えっとさ、君、ネットとかやらない人？」

「ネット？ いきなりなんだ」

「唯我論じゃあなたが自由になれないみたいだから、唯識論にしてあげるよ。ここは、私とあなたの意識がふれあっているコミュニケーション空間です。ですね？」

「……まあ、そうだな」そういう言い方もできる。間違っではないない。

「私たちは話し合いで、座標のX、Y、Zを成り立たせている基準を決めようとしています。仮に、Xを物理現象、Yをファンタジー、Zを意識だとしてみましょう。XY平面は、右上が唯識（物理現象でもありファンタジーでもある）、右下が唯物（物理現象でありファンタジーではない）、左上が虚構（物理現象ではなくファンタジーではある）、左下が虚無（物理現象でもなくファンタジーでもない）ってことね。Z軸は正が覚醒状態で、負が睡眠状態。絶対値ゼロ、ゼロ、ゼロで死んでる状態。おっけ？」

「現実とは、何処に入るんだ？」

「それは定義次第だよ。現実を、Xが正の値、Yが負の値、Zが正の値にあるものと定義します。すると、この兵隊さんはYの値が正なので、現実の集合からは弾かれます」

三鈴は兵隊の頭を指でピンと弾いた。兵隊は怒りもせず、照れて色目を使っている。

「私たちは、Yの値を替えるのではなく、『現実の定義』を変えることで、おもちゃの兵隊が見えている今を現実に含めようとしてい

ます。すると、Xは正または負、Yも正または負、Zは正の領域が現実に含まれることになって、現実が『ただ意識があること』と同義になってしまいます」

「……そう、だな」認めるしかない。見えてはならないものが見えているのだから。

「一方で、私たちの周りには、Xが正、Yが負、Zが正の値を現実とする意識の基準が定まっています。この『社会的な現実』の上になり立って、我々は相互に影響しあっています。そうですね？」

「それも、正しい」

「つまり、『社会的な現実』と、『私たちの現実』との差異が問題になるのです。私たちの現実には社会的な現実よりもよっぽど広いので、その分自由に生きることができませんが、人と話が通じにくくなります」

「……まあ、そうだよな。幽霊の話は、現実としては受け取ってもらえない」

「『私たちの現実』 - 『社会的な現実』 // ファンタジー。さて、このファンタジーは、私とあなたの間では、現実として作用するのです。事実、作用しています」

おもちゃの兵隊は、筒を構えて俺を撃った。

撃たれた人差し指に、痛みが走った。

「さて、社会的な現実と、私たちの現実、どちらが真実なのでしょう。その痛みは間違った妄想なのであり、社会的な現実に適応するために、治療されるべきものなのでしょうか。ガリレオが、異端尋問でやられたように」

それでも、地球は、回っている。

それでも、指が、痛む。

「そうではありません。今ここにおいてXは負、Yは正、Zは正。それでも指は痛んでいる。社会的な現実には弾かれたファンタジーであることも、現実には現実なんですね。ここはそういう空間だから

」

「空間に侵入してきた店員が、同じファンタジーを共有できた……  
って？」

「うん。意識が一つでも存在すれば、物理的にじゃなくて、数学的に、そこには空間が発生する。私とあなたの間にも、空間がある。愛やら恋やら友情やら敵意やら、その手の社会的な現実に含まれるものなら、あなたにも異論はないでしょう？ ああ、あの二人は愛しあってるな、とか。あの子はあいつが好きだけど、あいつはあの子が嫌いだろうな、とかさ。愛は物理的に存在していない。でも、社会的な現実否定されていないから、つまりは、社会の構成員全員に認められているファンタジーだから、ファンタジー足り得ていないんだ」

「そりゃ、恋愛沙汰を勘付いたりはするけど……でも、目に見えるってわけじゃ、ない」

おもちゃの兵隊は俺の指をよじのぼってくる。俺は虫のことを思い出しかけ、慌てて払いのけた。

パチンと、三鈴が指を鳴らす。

おもちゃの兵隊は、まるで最初からいなかったかのように、煙も残さず消えうせた。

「私は、自分の『意識の基準』を変えられる。だから、他の意識に対して、ファンタジー空間を成立させたり、既に成立しているファンタジー空間に介入して、変容させることができる。二人で完結しちゃってる恋人に、本当はお互いが嫌いなんじゃないですかって、殴りこみに行くようなことだってできる」

だから私は、如月さんと織原くんが作った空間に、意識を奪われることなく、ただ介入できたのだと、三鈴は言った。

「ほとんどの人間は、社会的な現実を取っ払うと何も残らない。

いいえ、『人間のほとんどの部分は』と言った方が正しいかな。

みんな既成の物語に取り込まれていくの。これは愛だ、これは憎し

みだ、　　ってね。至極当たり前の繰り返し。誰も、『見たいものが見れる』なんて思っていない。『願いが叶う』なんて、思っていない。願いは社会の中で叶えるものであり、社会の外における全てはただの身勝手。そう思ってる。例え一人で自由に夢を見れても、それを社会抜きで、誰かと共有できることなんて、まずない。誰かと共有しようとすることは、社会の基準を変えるってことだから、そう簡単にはいかない。そのファンタジーが過激なほど、誰とも話が通じなくなる」

同じファンタジーを、違う意識が共有するのは、世にも珍しい奇跡なのだと、三鈴は言った。

「恋愛は、目に見えないから社会に合うの。目に見える幽霊なんて、それこそ誰も信じない。過激だからね。　　フィクションは、社会に通用するものだから、ファンタジーとは相いれない。フィクションマニアはただの社会的な生ぬるい連中ってところかな」

美意子は、俺と織原の「知覚」そのものを変容させることができた。

「経緯を話してよ。どっちが先だったの？　ファンタジーの領域に足を踏み入れて、あまつさえそれを共有しようとしたのは、どっち？」

俺だ。

俺が見つけた、腹に穴のあいた少女。

黙っていることができなくて、ともかく誰かに話そうと思って、

俺は

それこそロバの耳のような、社会と自分を切り離れた男を、選んで。

「なるほど。それでその幽霊は、山に登って、同時に会って、二人で共有した途端に、共有にふさわしい死者　美意子さんの形に姿を変えたのね。そして、幽霊の形が変質したのを見たあなたは、それを幽霊全般の能力だと思った。幽霊は関数のようなもので、こちらの意識に自由に介入できる　と定義した。そしてそれを、織原くんに話した。共有した」

織原は、俺の仮説のせいで、信じるものに対してなら全能になった妹に、苦しめられることになったのか？　ザムザの、責苦。ある朝起きたら自分がファンタジーそのものになっていたという絶望。確かあの話にも、ろくでもない両親と妹が出てきたよな……。

織原は　学校に、何をしにきた？

俺が、誘ったのだ。三鈴を、呼び込もうと。織原が言った「三鈴も妹と同じだ」という言葉を、俺はそれなりに信用していた。なら、三鈴を抱きこんでしまえば、この訳のわからない状態をもっと把握できるかもしれないと。

あいつは、「それはいい」と同意して。

そうして、言葉通りに、会いに来た。性急に、もとより虫にまみれた意識に余裕などあるはずもなく。

部屋中に、いつしか虫が沸いていた。うぞうぞと、這いまわり、服の中に、入り込み、俺の右目に入り込み、三鈴の左耳の中に入っていく。ぐちゅると水の音がして、暴れる。脳みそが、くずれて

くずれて　たまるかと　静かな断末魔の代わりに

「ファンタジーは、共有できるのか？」と、俺は問うた。

「人間には、見えないものを、見る力があるのか？」

「見たでしょう」

「共有できる力があるのか？」

「今も怖がっているくせに」

「幽霊の力じゃなくて　人間の力なのか？」

「そうよ」と三鈴は肯定した。

「だからこんなものは 指先一つで消せるんだ」  
パチンと、指を鳴らす。

虫どもが燃えていく。熱のない炎が身体の中からたぎって、部屋中に満ちる。

虫だものな。虫は炎で死ぬ。そういうルールを作ってしまったえば、共有してしまえば、それで済むだけの話なのだ。

「あなたが家に逃げ帰ったあと、私は学校中の虫を焼き尽くしてただけだよ。そのときに、最初の一人に出会ったんだよ。織原くん、虫がいますよ」って囁きかけられた男子生徒。彼は、何処についてると聞き返した。織原くんは「あなたの耳の中に入っ て行きました」って、答えたんだった」

「信じたのか？」

「想像、しちゃったんだ。その心の隙を、幽霊に拡大された。一匹いるなら何匹いたっておかしくない。あなたたちの共有している悪意の塊は、いとも簡単に信者を増やした」

「それが、あつという間に、学校中に広まって……ああなつたと……はあ。せめて、あなたに女の子の幽霊がとりついてる、とかだったら、彼もそう簡単に視覚で再現しなかつたらうにね。虫、なんて。防ぎようがないよねえ」と三鈴は笑った。

「虫が身体に入ってくると喚いた彼の言葉を、我が身に置き換えて想像してしまった周りの生徒が、同じファンタジーを共有した。その悲鳴を聞きつけて、あなたは こう思ったんじゃないかな。『織原兄妹が、学校に来た』って」

「思った。まさか、それで……それが、ルールになった？ それで、被害が学校だけに収まったのか？」

「あるいは、学校中に飛び火した」と三鈴は言った。「悲鳴、身体的な苦しみの表現、ゴキブリムカデあるいは線虫の名前。「学校」という自我を規定する属性の上を、あつという間にミニ社会化した『意識の基準』が塗り潰した。私をのぞいてね……妹さんはやりた

い放題やりながら、私という未知を恐れていたのね。空間の潰し合い、牛魔王と孫悟空の戦いみたいなのが始まるかもしれないって。おかげで初動が遅れちゃった。今度から、周りにもっと気を配ろうと思ったよ」

なんだっけ。より強い動物になって互いを殺そうと変身を繰り返し、最後は鳳凰と蛇になって　ダメだ、よく思い出せない。

「でも、ルールを塗り替えたのは彼女のお兄さんだった。一度学校の屋上で出会っただけだから、彼のことはよく知らないんだけど。彼はもう何度も「飽きた」の一言で、ファンタジーを相対化してたんでしよう。でも、妹さんのことは、飽きたくなかったのかな」

「いや、あいつは、こんなに飽きたいと思ったのは生まれて初めてって、言ってたよ」

「なら、飽きるべきではなかった。自殺した妹さんに対する、責任感だったんだろっね。だから、妹が何をやっても、大目に見ていたと。なるほどなるほど」

三鈴はうんうんと頷いている。

俺は、まだ何処かで納得がいつていなかった。ファンタジーが意識の上に空間を作る。サインを通じて共有できる。でも、さっきの店員は、おもちゃと三鈴が言う前に、既に驚いていなかったか。とすると　空間ができると、サインはいらなくなる？　そんなテレパシーみたいなことが、成立するのか？

疑問をぶつけると、三鈴は「まだそこで引っかかってたの？」と無然とした。

「ルールがなくても空間は成り立つんだよ。グラフの左下、虚無も現実のうちなんだからさ。空っぽの空間に何を埋めようと店員さんの自由。彼が虚無の中で何を見たのか知らないけど、私はそれに、おもちゃという属性を与えて虚構に引っ張り上げただけ」

「虚無の中で、見る？」

「無色の水に、絵の具が混ざったら、広がるでしょう？　それと同じ、つまりはありのままの自分の姿を見てしまっただけ。我とも

認識できない本物の唯我だよ」

「よく、わからん」

「そう？ 私はよくわかるけどな」

三鈴は深いため息をついた。

「全部否定しようとして、結局それできなくてぐずぐずに腐るとか、したことない？」

そんなの考えたくもない。

「虚無から虚構に至りて唯識に達し唯物に堕ちず。 というのが今の私のポジションだったりするわけです」

けっこうなことだ。

「同意するよ」

虚無、虚構、唯識、唯物。その四つを同一平面上に並べて理解する手法に、個人的には無理を感じる。だが、それこそが社会的に一般化されえない、三鈴にとつての現実なのだろう。せいぜい幽霊を関数としか認識できなかった俺に、文句を言う筋合いはない。

ルールに従うのではなくルールを作る、というルール。それは確かに虚無であり、虚構であり、唯識だ。唯物にだけはなりえない。

「三鈴みたいな奴を、なんて呼べばいいんだ？ 霊媒師でもあり、魔術師でもあり 要は、総称なんだろう？」

「え、さあ……」三鈴はきよとんとした。

「誰にもそんなこと、言われたことなかったな。うーん、ファンタジーをごちゃごちゃしてる人だから、ファンタジスタとか？」

「それはダサイ」

「なら……巫女さん……うーん、シャーマニズムってわけでもないし……」

三鈴は眉根を寄せてしばらく考えていたが、やがてこう言った。

「やっぱり既成の名前で呼ばれたくないな。私は三鈴智子で、それ以上のものじゃないよ」

「わかった」

「あと、智子でいいよ、実は名字で呼ばれるの好きじゃないし。べつに深い意味はないからカン違いしないでね」

「……智子」

「なあに、計人」

ああ、そういや、頑なに俺を名前で呼んでいる奴が、もう一人いたな。

そいつは、自分ことを名前で呼ばせようとはしなかったけど。

トイレに行こうとボックスの外に出ると、通路の曲がり角で、店員が、りんごジュースの載ったトレイを持ったまま、立ち尽くしていた。

虚ろな目で、俺を見るときもなく言った。

「俺はおもちゃかな」

「……いや、自覚を持ってよ。あんたは社会の一員だ」

あいかわらず目はうつろなままだったが、ともかく彼は動き出した。

社会とはなんて便利な言葉だろうと、俺は思った。

## 8 追及の果てに

思うに、既成の空間が現実を踏み越えてファンタジー化したら、その空間について何の予備知識のないものでも、あのカラオケ店員のように襲われるのではないだろうか。智子の理屈、唯識、唯物、虚構、虚無の四分割をよく敷衍して考えるとそうなる。

学校の生徒は四種類に分割できる。

トリガーになった(らしい)俺の「学校に」という言葉、または織原の「虫が身体に入ってくる」という言葉　ルールに直接ふれた生徒。(唯識)

俺または織原を見ているが、ルールは聞いていない生徒。(唯物)

俺または織原の情報だけを間接的に知っていた生徒。(虚構)

俺または織原のことをまったく知らない生徒。(虚無)

襲われなかった生徒は、自分のルールを以って空間に干渉できた智子以外にいない。

虚無の領域にいる生徒にすら害が及ぶのなら、ファンタジー空間における『ルール作り』は、人間の自覚など関係なしに、空間を覆うのだろう。それこそ物理法則のように。初めて火を見て、火がなんなのか知らなかったところで、やけどしないことにはならない。

智子は初歩的な思い違いをしている。あのカラオケ店員はやはりおもちゃの兵隊を見たのだ。そして、ジュースを持ってきたものの怖くて部屋に入れぬまま、入り口で立ちつくしていたに違いない。

仮説の咀嚼に精いっぱい俺が、ふと顔を上げたのなら、あの店員に気付いていたんじゃない……。

ドア越しに俺たちの会話は聞こえただろうか。……いや、防音だしそれはない。だが、あの店員がドアの隙間を開けてなかったかどうか、俺には断定することができない。

だが、俺と会話した時点であの店員は新たに追加されたルー

ルに怯えていた。おもちゃの兵隊は、彼自身を表象する心の影のよ  
うなものに変わってしまったのだ。

俺は勝手に、密室の中だけがファンタジー空間なのだと思ひ込んでいた。でも実際にはあのフロア、もしくはビル全体が彼女の『意識の基準』の変更に巻き込まれていたのだとしたら。

ドアの開閉など関係なく、おもちゃの兵隊は、彼の内面に『なつた』のだ。

何故智子はそんなことをした？ さっきの疑問こそが間違いだ。

初步的な思い違いなどではない。説明に紛れこませて、一人の人間を支配するような真似をしたのは。

おもちゃの兵隊、その意味するところは、放置するには不吉だった。

智子は決して善性の人間ではない。世が世なら魔女と呼ばれても仕方のない行為だ。織原のやり方の方が、単純明快なだけマシにすら思える。

いつ俺が兵隊にされるのか、わかったものじゃない。

日が暮れて。この後予定があるという智子とは駅前で別れ、強い風が吹く帰り道。

街灯は細く、家々は何処か暗いままだった。それでも、日が沈むのが遅いこの頃、空にうつすらと残る赤色の名残が、見慣れた街角を幻想的に見せている。

『意識の基準』。現実的でないが故に社会から弾かれたファンタジーを現実として捉えなおすことなんて、凡人には出来やしない。ガリレオが教会に対して積み上げたような強固な自我を、俺は自分の中に育てて来なかった。どちらかという、現実にもうまく対応して、楽しく過ごそうとしていたんだ。

そしてそれすら、うまくいかない。

俺が細々とやりこんだ日々は他愛のない原始的な恐怖で崩れ去った。うまく実感がわかない。ただ、無気力だけがある。虫はともか

く、学校に対しては、失う恐怖や奪われた怒りのようなものが沸いてこない。そして虫はもう、カラオケ部屋で殺されてしまった。

心に何の力もないのに、どうして俺の足は動いてるんだらうなと不思議に思う。そういう風に鍛錬してきた。理由なんて必要ない、軽く、軽く、何処までも軽く。やりこんでやりこんで、時間をかけて、欠けた熱意を取り戻そう。そして、虚構にかまけて失った現実を取り戻そうとしていたのに。

俺はまた、唯物のくだらなさに呆れ、逸脱しようと虚構を望み、一瞬の唯識に出会い、臨んだ虚構に出会えたと喜び、虚構にかまけて危険を引きこみ。考えれば考えるほどくだらなく思えてくる。望んだもの。情熱は、他の誰かにとつては現実に持ち合わせているものであっても、俺にとってはファンタジーの領域だったのだ。楽しく、楽に生きるなんて根性で、何かがやりこめるわけもないだらうに。

俺は、自ら望んで足を踏み入れた日常の外れで、死にかけの少女に出会い。

息も吐かず、静かにベンチに座っているという、見切ったはずの不自然を忘れて、警察を呼ぶという常識的な『対応』をした。

空っぽだったから、日常の外を求めたところで、実際に出会えたところで、『その外側を日常に回収することしかできなかつたのだ』。

一人で埋めれない不可解を、公権力を 犬の鼻を以って埋めようとし。

それも不可能だとわかると、今度は一番信頼できる、現実にまみれた男を頼った。そう、俺が退学した織原の家に入り浸っていたのは、あいつが誰よりも現実に苦しめられていたからだ。事もあろうに、他人の不幸に憧れた。今もなお、憧れている。あいつには生きる理由もあるし死ぬ理由だってある。

俺にはない。

そうして、やっと見つけられたはずの幽霊を、奪われた。

織原は、唯物の男ではなかった。

俺の下らなさこそが唯物だったんだ。現実の中であくせくともがいて、たぶん死ぬまでそこから出られないのが、俺という人間なんだ。

あれほど非日常を求めているながら、物理に還元できない現象に出会ってからのこのストレス。言いようのない拒否感。現実を否定したところで、現実にしかなる辺がないから、首を垂れてすがっている……。

過去に、できるか？

俺は現実の定義を、『意識の基準』を変えることができるのか？  
できなければ俺はきつと、虫に塗れて死ぬことになるだろう。死という形で現実を否定しきった少女が持つ、『人は虫けら』という基準の中で。

「それも、対応じゃないか」

袋小路だった。

家に帰ったところで、それが何だと言うのだろう。散々幻を見たあげく、最後に家族を肯定してひっくり返すありふれたファンタジーにも、俺はとっくに飽きていた。

俺は……何がしたいんだ。

「君、如月計人だね」

低く、冷たい声でした。

顔を上げると、電信柱に大柄な女性がもたれかかっていた。男物のスーツ姿に、革靴。年の頃は三十 いや、四十代かもしれない。日に焼けた肌に、傷跡のように深いしわが目立つ。読み解けない目と表情だった。次にどんな表情で、どんな声音で喋るのか、まったく想像がつかない。

それでも女だと直感できたのは、化粧と髪型と声質のおかげだった。

ひどく、現実感のない。

こんなのと夜道で出くわしたら、以前の俺なら一目散に逃げている。唯物かどうかはともかく、日常に属しているような代物ではなかった。

「あたしは警視庁所属鷹代警察署の後藤という」

女　後藤は懐から取り出した警察手帳の表紙を開いてそう言った。近寄って、俺の鼻先に突きつける。　後藤三矢子。白けたよ

うなだらしのない顔写真が、現物のそれとあまりにも違って見えた。「君のことは加藤巡査から聞いている。調書も見せてもらった。幽霊に遭遇したんだそうだね」おもしろくもなさそうな声で、そう言った。俺の足は張り付いたように動きを止めていた。

「事件に、何か進展があったんですか？」

「別件だ。あたしは少年課の刑事だ。夜中に街を走り回ってるようなガキを検挙するのが仕事なんだ」

冗談だったらしく、口元をひんまげて笑った。背筋が冷えるようなことを言われては、愛想笑いもできなかった。

「刑事……ええ、わかりました。でも、こんなところで何の用なんですか？」

真空のような住宅街。空に残っていた紅が薄れて、街灯が本領を發揮する。

俺の理性はこんなときでもうまく刑事に対応している。

俺がここに居ることを、どうして知っているのだろうか。張り込むなら、家で張り込む。帰り道を狙うなんて通り魔のすることだ。

だが、警察手帳は本物。なら結論は一つしかなかった。

「今日一日、付けさせてもらってたよ」と、彼女は尾行をあっさり認めたと認めた。

「あっさりしたデートだね。それとも、カラオケ部屋じゃ激しかったのかい？」

「セクハラですよ」と俺は言った。声は思ったより震えていた。

「ま、駆け引きなんざいらんよね」と、彼女は俺の肩を掴んだ。ぎりぎり暴力にならないような、強い手ごたえで。

「あんとと、三鈴ちゃん。二人だけなんだ。あの日登校した人間の中で、今も元気に動いてるのはさ」

「まったく、初動捜査がなっていないんだよねえと、後藤刑事は忌々しげにぼやく。」

「学校でふにやけてる奴らのことばっかり注目して、生徒が二人もまともな状態で家に帰ってたことに気付いてないってのは、どうかしてるよねえ」

「……みんな、自宅待機してるって、聞いてますけど?」

「ああ。事件発生日の正午、十二時きっかりに、みんないつせいに家に帰ったよ。すくつと立ち上がってね。録画に残ってるんだけどさ。いやー見せたいなあ、あの気持ち悪さ。催眠術でもかかってんのかって話だよ」

智子は確か、虫を焼き殺したと言っていた。彼女なら、学校という記号で区切られた空間に新たなルールを追加することは難しくくない。

家に帰れと、たった一言付け加えるだけでいい。

「みんな、無事ではないんですか?」

「虫が怖いって、引きこもってるよ。全員が全員とも」後藤刑事は、不自然を強調するように強く区切って発音した。

「食べ物まで虫に見えるそうさ。餓死しかけたのも十人二十人って人数じゃない。ようやく病院の受け入れ態勢が整ったから、家族が希望する順に、早い者勝ちで入ってもらっている。なあ、これって、何なんだろうね。あたしにはさっぱりわからないんだけど」

次に何を言い出すのかわからない、恐ろしいほど表情を殺しきった無表情で、彼女は言った。

「あんたも、程度は軽いけどこの前まで伏せてたんだろ。不眠の次は、三日ぶつ通して眠り続けて。だから、怪しいってほどでもなかったんだけどさ。元気になって、三鈴ちゃんに会うなら

話は別だ」

肩に乗せられた手に、力がこもる。

「調べなおした。そしたら、あんたらしき男子生徒が、裏門から公園を抜けて、信号を無視して走りさって行ったのを近所の主婦が見てたんだ。当日、十二時よりはるか前の、午前八時を過ぎた頃。

怪しいだろう？ 裏門から出てきたってことは、あんたも虫にとりつかれているはずなのに」

「疑われて、いるんですか？」

「みんな疑ってるよ」と彼女は言った。「誰でも疑う。それが誠実つてもものだろ。どんな不可解な事件だろうと、なあなあでは済ませられない」

時系列が、おかしい。

智子とのデートを見てから俺を調べ直したというのなら、俺を尾行していたと言うのははったりだ。警察は智子を尾行していたんだ。俺はたまたま今日くつついていた付属物。おそらくこの尋問は、後藤刑事のスタンドプレイだ。俺を威嚇するメリットはなんだ？ 古畑でも気どっているのか。それとも、本命の三鈴を落とすための準備か。

俺と三鈴が共犯関係にあると思っているのなら、この段階で警察が尾行をばらす意味などない。

不用意な、焦り。つまりはそれほど、切羽詰まっているということ？

「な、三鈴ちゃん何話してたんだ？」と後藤刑事は問う。

「あんたを信用してるんだ。夜中にお化けに会ったって、律儀に救急車と警察呼べるようなお人よしだもんな」

「お化けじゃない。ベンチにも、裏手の木々にも、血の跡がついてました」

「いや、それが、ついてなかったんだ」と彼女は言った。

何を、わけのわからないことを。

「俺は確かに見ました。管理人のおっさんも、やってきた駐在所勤務の警官も、救急隊員も、同じものを見たはずです」

「でも、ルミノール反応はでなかった」と、後藤刑事は言った。「立ち話もなんだ、どつか店行って話すか？」

「任意同行は拒否します」と俺は言った。「きちんと、説明してください。ルミノール反応が出なかったなら、俺はとつくに偽証罪でしよっ引かれてるはずだ。説教の一つも食らってないなんておかしい」

「……では、立ち話をしよう」と後藤刑事は頷く。俺は周囲を確認する。小学生と主婦が数人、視認できる。こちらの話は聞いていないようだが、チラリと目が合う。そのありふれた表情で確認できる。

大丈夫だ、後藤刑事はともかくこの空間内にいる。俺だけが見てる幻つてわけじゃない。

「ルミノール反応は、消えたんだ。警察犬が臭いをかいで、追跡しているさなかにね」

「消えた……？」

「警察犬が、急に臭いを追えなくなった。戻ってみると、ベンチに残っていた血痕が綺麗に消え去っていたんだ。拭き取られた後もなく……ね。だから、あんたの偽証にはならない。あんたが嘘を言ってるなら、犬の鼻も嘘をついたことになる。そんなバカな話があるか？」

「ないでしょう」

俺は記憶を回転させる。言うべきかどうか、迷って、またもすがったのは警察には協力するべきという常識だった。思考停止だ。

「けど、俺はつい一週間ほど前に、自分でも確認しに行っただけです。そのときには、ベンチに血はなかったけど、すぐ裏手の木の幹に血痕を見つけました。だから、ベンチの血は誰かが拭いたんだと思ってた」

「……なるほど。ならばそれは、別の誰かが流した本物の血だということだ」後藤刑事は深く息を吐いてから言った。

本物の……血？

「日付はわかるか？」

「五月……二二日の放課後」

「君以外の目撃者は？」

「……いません」

「……そうか」

あたしから担当に連絡しておこうと、彼女は言った。指がもの欲しげに動いていた。おそらく、煙草を求めてのことだろう。

「で、本題だ。三島高校で起こった集団催眠事件 他に言いようもないからそう呼ばれているんだが。この件について、何か心当たりはないか。そもそも君、どうやって逃げ切れた？ 体中を虫が這ってくる、んだよな。証言によると」

「……全員に、取り調べを？」

「口の利ける奴には。精神科医の立ち会いの下で、一人五分が限界だ。だから遅々として進まない。 三日錯乱して、その後三日眠り続けた君のことも、当然後回しだった、ということだ」

「俺と三鈴の他に、回復してる奴はいるんですか？」

「一人もいないと、さっき言ったがな」と、後藤刑事は凄みのある笑いを見せた。

「だから、あんたら二人がアリアドネなんだ。三鈴は別の刑事が追ってる」

「……どうして尾行をばらすんです？」

「あたしは、十中八九、三鈴智子が本星だろうと思ってる」と、彼女は言った。

「今日のデートは、催眠の効きが薄くて、復活してしまった幸運な一人に、ダメ押しの一撃を仕込んだのだろう。という推理だ。外れているかもしれない。だが、当たっていたらそれこそ最悪だ。君に潰れられる前に、少しでも話が聞きたかった。 どうやら、外れ、らしいがな」と彼女は苦笑する。豊富な笑い方のそのどれもが作り物めいている。

……そう、三鈴は、犯人ではない。

俺は犯人と山に行った。……奴を巻き込んだ俺の方が、どちらか

という犯人に近い。

「協力したいとは思っています」と俺は言った。

「でも、正直、俺らにも何が何なのかさっぱりわからないんです。三鈴とはいろいろ話をしましたけど、結局建設的な仮説は一つも出てきませんでした。虫が何処から沸いたのかも。そもそも学校に居る全員に催眠術をかけるなんて、できるとは思えない」

「だが、他に検証できる仮説はない」と後藤刑事は言った。

「納得できなくても、疑えるものは全て疑うんだ。それが誠実というものだ」どうやらこれが口癖らしかった。

「共通するトリガーは、なくもない。例えば、校舎。互いの制服。

校章など。学校に居る以上必ず目にするものは多い。そういうものに 本当に、未知としか言いようがないが なんかの催眠術のトリガーが仕掛けられていたかもしれない」

「……それだと、学校の関係者だけが虫に怯えているのがおかしい。……えっと、無事なんですよ、救助に当たってくれた方々は」

「無事だよ。わけのわからない状況に怯えてはいるがね」

あたしだってそうさと、後藤は言った。

「帰属意識が催眠の条件だった、としか考えようがない。三島高校を自分の内側にカテゴライズしている とかね。だがこれも、いまいちだ」

後藤刑事は言葉を切って、俺の反応をうかがった。

「……俺は」沈黙に耐えられなかった。

「何も、わかりません」

「君を犯人だと仮定すると、警察犬の失態の説明がつく」と後藤は言った。

容赦のない、断定だった。

「何故なら、君以外の誰であろうと、三島高校と同じような催眠を、深夜の墓地にかける動機が見つからないからだ。……君ならわかる。君は自分の催眠が、警察にも通用するかどうか、試した。結果、通用した。警察は催眠術に対応できないと見切った。だから学校

で本番を試したんだ」

筋が通っていることに、寒気がした。

「俺は、そんな無意味なことしません」

「そうか？ 所属しているコミュニティに対する恨みは、誰だって多かれ少なかれ持っているだろう。君は、学校ではうまくやっていたのか？ 誰の証言も取れないから、さっぱり状況がつかめない」「うまくやっていました」と言うしかなかった。

「そうか。 なら、誰かの恨みを買ったことは？ 君は、深夜に墓地まで走ったのはイレギュラーだったと証言していたね？ その日、誰かといつもと違った接触を持ったことは？ あるいは、もつと前に。不自然なことをされなかったかな？ 誰かが君で催眠を試した、という筋もあるんだ。自分の弁護は自分でしないと」

俺は目を閉じて考えようとしたが、ダメだった。燃やされたはずの虫が、まだ闇の中に巢食っている。智子は、唯識の範囲は燃やせても、心に映りこんだ虚構までは燃やせていないのか？ …… そうだ。それなら、俺は虫という概念そのものを知覚できなくなるはずだ。だから、彼女が学校中の虫を燃やしても、誰一人として治らない。

「どうした？」

「い……え……。何も、思いつきません」

気分が……悪く、なってきた。

この人の現実も、唯物に規定されていないんだ。刑事のくせに、いや、刑事だからこそか。唯物よりも現実に合わせて、大胆に仮説を立ててきやがる。

俺よりも、よっぽどうまく対応している……。

どう、すればいい。織原のことを吐くか？ ……いや、あいつを山に誘ったのは俺だ。保身をするのは最悪だし、保身としても最悪だ。

それに、あの幽霊は 美意子は、俺の

俺の 幽霊だったのに

「おい、大丈夫か？」肩をつかむな。俺にさわるな。全身に、言いようのない怒りが満ちていた。

あえて言葉にするならば、こういうことになるだろう。

「……この、虫が」

「え？」

「なんでも、ありません」

俺は俯いたまま、早足で逃げた。

後藤刑事は止めなかった。ついて来てはいるだろうが、期待するだけ無駄だ。俺はただ、家に帰るのだから。

「今日のところは……それしかないが」

何一つわからないままで、それでも、やるべきことを、一つだけ思いついた。

取り返そう。

彼女は俺の幽霊だ。

俺は彼女と二人きりで、ちゃんと話をするべきだったんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2515t/>

---

Anti/Magic end

2011年6月3日14時55分発行